

We

12
2004

特集

「ニート」と

「引きこもり」



【トークライブ】

玄田有史さん VS 二神能基さん

「ニート」と「引きこもり」

～若者が見つけられないこの国の希望の正体とは!?

一歩を踏み出す勇気と他者への想像力をもって 竹森真紀
学校現場に内心の自由を求め、「君が代」強制を憲法に問う裁判（ココロ裁判）

発行 全国不登校新聞社

Fonte

不登校新聞が新しくなりました。
タイトルも **Fonte**(フォンテ/ラテン語で「源流から」の意味)
に、思いきって変更しました
より深く、広く、充実の紙面へ。

不登校新聞が、
変わりました。

■大阪編集局 〒537-0025 大阪市東成区中道3-14-15 TEL 06-6978-6615 FAX 06-6978-6626 mail to: osaka@futoko.org	■東京支局 〒162-0065 新宿区住吉町8-5 TEL&FAX 03-5360-1231 mail to: tokyo@futoko.org	■名古屋支局 〒464-0036 名古屋市千種区本山町2-33-1 TEL 052-759-2375 FAX 052-759-2376 mail to: nagoya@futoko.org
--	---	--

毎月1日・15日発行／購読料金 6カ月4800円
郵便振替口座 00100-6-22077 全国不登校新聞社

特集 「ニート」と「引きこもり」

【トークライブ】

玄田有史さん VS 二神能基さん (司会: 石臥薫子さん)

「ニート」と「引きこもり」

～若者が見つけられないこの国の希望の正体とは!? 2

一步を踏み出す勇気と他者への想像力をもって

学校現場に内心の自由を求め、「君が代」強制を憲法に問う裁判 (ユコロ裁判)

竹森 真紀 23

カインドリボンサービス—NPO法人Winkの面接交流サポート事業

新川てるえ 32

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 35

“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」 沼崎 一郎 36
—女子大での教育経験から 第13回 セクシュアリティの不平等

「ひまわり」の日々 (8) 一通の手紙 入江 一恵 40

■連載

女が歳をとるとということ (88) 冬至 木村 栄 42

わがまま映評 (18) 『ライファーズ』 満田 康子 44

乱読大魔王日記 (58) 冠野 文 46

過去を振り返らない／先を考えない (47)
「お父さん、信用はね…」 松本 一郎 48

Gender Free Breeze (7) 言ってみるものだと思う 三浦 純子 50

みんなで楽しく政治をしよう! (8)
「おや?」から解決プロジェクトチームへ 鈴木めぐみ 52

仕事場の周辺から (8) 石渡 秋 54
いつどこで起こるかわからない自然災害からのサバイバル

私の好きな言葉 (8) 《ジャスト・フローティング》 二見れい子 56

ベル・フックスと『関係性の教育学』 (7) 石原みき子 58

●編集長だより 61

●編集後記 62

表紙・イラスト 川口民子

■特集 「ニート」と「引きこもり」 □トークライブ

「ニート」と「引きこもり」

若者が見つけられないこの国の希望の正体とは!?

玄田有史さん VS 二神能基さん VS 司会進行・石臥薫子さん
(ジャーナリスト)

「ニート」(NEET/Not in Education, Employment, or Training) 一学ぶことにも、働くことにも、希望を見出せない若者50万人。
「引きこもり」100万人。

「ニート」の存在をその著書で問うた玄田有史さんと、引きこもりの若者の再出発支援を通して「スローワーク」の場づくりをする二神能基さんが、今、最もホットな話題について語り合った。

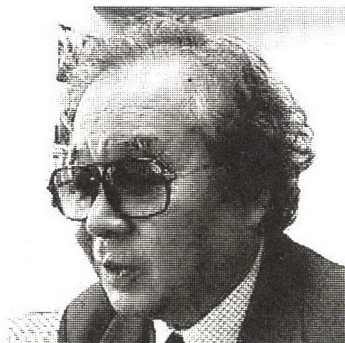
そのトークライブ(04年10月8日)の記録を、主催の「ニューススタート事務局」のご協力を得て、紹介させていただく。

まとめ/稲邑恭子



玄田有史さん

(げんだ・ゆうじ) 1964年生まれ。学習院大学教授を経て、現在東京大学社会科学研究所助教授。専攻は労働経済学。著書に「仕事のなかの曖昧な不安」(中央公論新社)、共著に「ニート」(幻冬舎)など。



二神能基さん

(ふたがみ・のうき) 1943年韓国大田市生まれ。NPO法人ニューススタート事務局代表。1993年に目標喪失の若者を支援する「ニューススタート事務局」を設立。以来、「家族をひろく」を理念に、さまざまな取り組みを続ける。

●ニートって、引きこもりとどう違うの？

司会 パネリストのお二人をご紹介します。東京大学社会科学研究所助教授の玄田有史さんです。今年七月『ニート』（幻冬舎）という本を、ノンフィクションライターの曲沼美恵さんと共著でお出しになりました。日本におけるニート問題の火付け役と言っても過言ではないと思います。続きましてNPO法人ニュースタート事務局代表の二神能基さんです。一九九三年に目標喪失の若者の再出発を支援するという目的で、ニュースタート事務局を設立されました。「家族をひらく」を基本理念に、これまでに五百人を超える若者の自立を支援してこられました。私は、司会を本日務めさせていただきます。石臥薫子いしおし かおること申します。テレビのディレクターとライターの仕事でフリーランスでやっております。今年の初めから、ニートの問題を取材してきました。その中でお二人を取材した縁で、今回、司会をおおせつかりました。

さて、今日のシンポジウムでは、四つの論点について、お二人に激論していただきたいと思っています。

一つ目の論点は、引きこもりとニートの境界についてです。二番目はニートの実像に迫りながら、彼らが聞いているのは何なのかを考えていきたいと思えます。三番目は急増するニートの問題に対して、私たちは何をどういうふうに変えていけばいいのか。そして最後に、提言のようなものをなんとかまとめることができたらと考えています。

それではさっそく、一番目の論点からまいりたいと思います。私自身、この問題を取材しながら一番聞かれたのが、「ニートって、引きこもりとどう違うの？」というものでした。実は、ニートそのものの定義もよく分からないということで、混乱しているようですが、まず、玄田さんはニートをどのように定義しているのでしょうか。伺えますでしょうか。

玄田 ニートはもともと英語で「Not in Education, Employment, or Training」つまり、学校にも行っていないし、働いてもいないし、職業訓練も受けていない人なんです。日本では、「働きたいと思っていないけど、具体的職探しということまでは、今まだしていません」という人たちと、「働くことに対して希望は持っていません」という三四歳くらいまでの人たちを二

ートと考えていこうかなというふうに、今僕は思っています。

『労働経済白書』が九月に出てから五二万人という数字が言われますが、「白書」にはニートが五二万人という表現は一切ありません。小杉礼子さん（独立行政法人労働政策研究・研修機構副統括研究員）たちの研究グループからはニート六三万人とか、いろんな数字も言われますが、本当は何人いるかは、まだよく分からない。定義次第では、もうちょっと多くて一〇〇万人を上回るかもしれません。

それから最初にある新聞社でニートという言葉が出たときに「働く意欲がない若者」「働かない若者」という表現が大見出しで出たのですが、それは私たちが理解するニートとはちょっと違う。「働かない若者」というより、「働けない若者」のほうがずっと近い。先ほど「働く希望を持っていない人たち」をニートの一部だと言いましたけど、希望を持ってなかったとしても根本的には働きたいという気持ちを持っている人たちはたくさんいる。「働く意欲がない」とか「働かない生活を満喫する甘えた奴らだ」というニュアンスの報道や記事には個人的に抵抗していこうと思ってい

ます。

司会

働かないのではなく働けないのだという話がありましたけれども、二神さんは、ニートと引きこもりの問題をどんなふうに捉えていらっしゃるんですか？

二神

引きこもりとニート、どちらも定義が混乱しておりますして、人数も一〇〇万人とか五〇万人とか、根拠はいずれもないわけです。ただ、ニートと引きこもりの関係については、私自身は、玄田さんの本を読んで、実はかなり明瞭に分かった。ニートの中に引きこもりがすっぽりと含まれているということがストンと落ちたと言いますか。

うちは引きこもり解決の三点セットという方法で引きこもりに対応しておりますして、一つ目は訪問部隊、レンタルお姉さん・レンタルお兄さんと言っているんですが、家庭を訪問してなんとか彼らを引き出すわけです。二つ目は若衆宿。引きこもりの子は人間関係が苦手な子が多くて、人間関係は「学ぶより慣れろ」ということで、若者が集団生活をする寮をつくったわけです。三つ目は仕事体験塾。これは寮にただけではなくなかなかコミュニケーションも進まないものですか、介護やIT事業部、レストランなどいろんな仕事

を体験させています。協働する仕事が会話を生むわけです。一つ目の訪問部隊は間違いなく引きこもり対応ですが、では家を出てニュースタートに来れば引きこもりは解決したかというところ、その先にはなかなか動けない。そこで若衆宿や仕事体験塾が出てきたわけですが、それらは実はニート対応ではなかったかと。ニートだったから引きこもったのであって、問題はニートだということにあるのではないかと。引きこもり問題はもうニート問題に吸収すればいい。ですから、引きこもりの問題は本日こでなくなつたので、マスコミでは引きこもりという言葉をお使いにならないように願いたい。「引きこもり」という暗い言葉のせいではないぶんと「引きこもり」対応が混乱した。

『ニート』の本は、私にとって本当に救いの本でした。若者にとっても、大いに救いになる本であつて欲しいと思うんですけどね。本当に、玄田さん、ありがとうございました。

玄田　なんか終わりたいですね。

二神　今日はこれで（笑）

●ニートを生み出す社会の問題

玄田　『ニート』についていろんな方から書評をいただいて、逆にいろいろ学ぶことが多かつたんですが、作家の重松清さんが「本当の希望とは何か」をちゃんと考えるという問題をニートと呼ばれる人たちはわれわれに提示しているんじゃないかとお書きになった。働く希望がないというのは意欲や能力がないこととは違うわけです。ただ希望がないと思つているのは、ニートとか引きこもりだけではなくて、たぶんみんなそうなんです。希望つて何だろう。もつと言えば、お節介かもしれないけど、希望がないという子たちに対して、自分が何かできるかもしれないと考えるためのきっかけを、ニートや引きこもりはわれわれに提示しているような気がする。

二神　引きこもりの問題では、まず精神科医が専門家のように登場したために病気治療のイメージが広がり、薬害に苦しむ若者を大量に生み出す二次被害を拡大させてしまった。最近では、精神科医も、引きこもり問題に対応できるのはごく限られた部分であると、や

っと告白してくれてですね、あちらの業界とは縁が切れそうなんですけど。問題なのは心理学系で、心の問題という対応をするために、若者たちはますます出口なき迷路を延々と歩かされている悲惨な状況です。僕は、引きこもりも個人の問題ではなく、やはり社会の問題だととらえないと解決の方向に向かわないと思っています。『ニート』を読んで、やっとここで共闘できる相手を見つけたというのが、今の僕の気持ちなんです。

玄田 今思いつきました（笑）。僕は四〇歳ですけど、これから僕が引きこもりになることはないだろうという緩やかな自信はあるんですが、ニートになるかと問われたら、かなり自信があるという感じがする。ニートも「状態」ですから、誰でもなり得るんです。

二神さんがおっしゃったことで、やはり真面目に言わないといけないと思つたのは、社会のシステムの問題であつて、個人の問題ではないということです。九〇年代後半に失業率が上がったときに、中高年のリストラが大変と言われました。たしかに大変だなと思う一方で、若年も失業率が上がっているじゃないかと言ふと、必ず「それは意識の問題ですよ。働く意欲が弱

いのがダメなんです。だから、職業意識を啓発するとか、もつと働く意欲をもてるようにしないとイケない」と言われた。でも私はそれに対してものすごく生理的な違和感があつた。国であれ政府であれ、人の意識を変えてやろうとか、意欲が低いから正してやろうとかいうのは、ものすごく傲慢な発想だと思ふんです。

結果的に個人に表われていることでも、それは生み出す環境とか状況の問題であつて、そういう面では、ニートとか引きこもりとか、フリーターとか失業者とかが、意欲の低いダメな人間なんだって言われる社会に對して、ささやかな抵抗をどう繰り返していくかだと思ふんです。

●真面目さといひ加減のなさ、豊かさど欲のなさ

二神 玄田さんは引きこもりになる素養に若干欠けるな、かなりいい加減な人だなというのがあつて、これがやはりキードと思ふんです。引きこもりの子はもう少し真面目な、いい加減さのない子が多いんですよ。

玄田 二神さんはどうですか？

二神 紙一重ですね（笑）。今うちの若者たちと話

して非常に感じるのは、物質的な豊かさに対する疑問というか、そういうものが問題の底辺にあるなど。例えば、僕はお酒を飲みながら「お前、欲しいものを一つ言ってみろ」という質問をよくするんですが、最初はほとんど例外なく「別に」と答えるわけですよ。「別に」じゃ面白くないから、「お前、二回目は必ず一つ答えろ」というふうに脅迫して聞くと、「根性」なんてのが出てくるわけですよ。これは親から「お前は根性がない」と相当言われているなど。次に「身長」とか。まあ三つ目くらいに誰かが「友達」とか言うともんな「友達」とか「恋人」と言い始めるわけです。僕は昭和十八年生まれですけど、欲しいものと聞かれたら、二十代だとたちどころに十くらい言えた。ですからそういう意味で、物質に対する欲望が非常に低いと言いますか、そういう問題がベースにあると思うんです。僕らは働く理由ははっきりしていた。あの車を買うためには何十万稼がにゃいかんという明確な金額目標があったわけですけど、欲しいものが「根性」の場合は、根性が欲しいから働くというふうにはならないわけで、われわれの世代とは明らかに違う若者たちが育っている。それが引きこもりとかニートとかいいう

形に表われていて、彼らが問いかけている問題は何かということ、われわれは自分たちの時代の問題として考える必要があるだろうと思っっている。

玄田 取材を受けると「やっぱりニートっていうのは豊かさの産物なんです」と聞かれて、親がお金もあるし何でも買ひ与えるから、結局選択できなくなつてニートになるんじゃないかと言っんです。僕はちょっと違うと思っっている。「ニートはパラサイトシンダルのせいです」とも言われるけど、パラサイトシンダルの原因ではなくて、食べられないから親にパラサイトするわけで、それは結果だと。

ただ、二神さんがおっしゃった意味で、豊かさに関係していると思うところはあります。僕は昭和三十九年生まれですが、僕が大学生だった二十年前は、もてる男の条件は「三高」（高身長・高学歴・高所得）だった。今は、もてる条件つて三高じゃない。絶対に違う。なんで、この身長も高くないし決して豊かそうに見えない子がもてるんだらうと。理由は簡単なんです。もてる男の条件は、「相手が言っつてほしいことを言っつて、言っつてほしくないときには言わない」ということが、ちゃんとできることなんです。それをボクは豊かさだ

と思った。

けど、それをしすぎると、つまり、こういうことを言ったら人が傷つくかもしれないとかいうことをすく考えすぎると、ニートになるんです、たぶん。だからさつきから何度も言っているけど、ニートは誰でもなるんです。

●一番嫌でないことを選ぶ

司会 『ニート』の本の中で取り上げられているのは「やりたいことを探している」人たちですが、「やりたいこと」というのは、彼らにとつて何なのかをニ神さんに伺いたいのですが。

ニ神 それはあんまり聞かれなくなかったね。手の内を見せることになるから(笑)。

うちの仕事体験塾では何種類も仕事をやらせていて、こちらが初心者者の時は、「お前、一番好きな仕事は何だ」と聞いたんですよ。すると全員が、これもまた「別に」と答えたわけですよ。それで、この質問の仕方ではダメだと。今はある程度やらせたあとに「お前、一番嫌な仕事は何だったんだ」と聞くんです。

ると勇んで答えますよ。「介護だけは嫌です」とか。これで僕の勝ちなんですわねえ。「次に嫌なのは？」と順番に聞いていくと、最後に一番嫌でないやつが残るじゃないですか。そこで「お前ねえ、二五歳にもなつてね、ぼちぼち動かないといかんだ。お父さんに聞いてみる。お父さん、本当に好きな仕事をやったのかと。好きな女を嫁さんにもらったのか」と。たいていね、一番嫌でないやつを選んだという話になるわけです。ですからね、二五にもなれば、一番嫌でない仕事でとりあえず食うことを考えないといかんよと、これで若者は意外に落ちるんですよ。好きな仕事というと空転する話になるのでね。いろいろやらせて、一番嫌でない仕事に落とし込むというのがニユースタートの選ばせ方の手の内です。

●やりたい仕事がなくとも不幸なわけではない

玄田 なぜやりたいことを求めるかというと、小さいときから親とか先生から「やりたいことを見つけて、やりたいことをやりなさい」と言われて、そうか、やりたいことがないとダメなのかって思うからです。だ

から『ニート』では「やりたいこととかやりたい仕事が見つかった人はハッピーだけど、やりたいことやりたい仕事がないからといって、絶対に不幸なわけではない」と、それだけが言いたかったんです。

親は「やりたいことをやれ」というのであれば同時に「これだけは絶対やってくれるな」ということもしつかり言ったほうがいい。ボクだったら「絶対銀行員だけはなるな」と言う。なんでだつて言われたら「嫌いなものは嫌いだ」と。理由なんてなくてもいい。何だけはやりたくないとか、なつてほしくないってことを、きつちり言った方がいい、そうすると案外選ぶんです。

たくさんいろんな情報があつて、いろんなものから選択できるほうがそれはいいです。けど、もしラーメン屋さんに行ってラーメンが三万種類書いてあつたら、それはきつい。「うわー、どれ選べばええんや」と思つて、あの醤油ラーメンと味噌ラーメンと塩ラーメンしかなかつた時代がなつかしい、となる。選択がものすごくあるとどうなるかというと、必ず、お薦めって誰かが指さしたものを、みんなが選ぶことになる。今確かに選択肢は多様で、なんでも即座に選べる時代

になつているけど、それだと苦しいから、結局、誰かがお薦めつてやつになるんです。

●仕事をやる意味を考え始めた世代

司会 選択肢は多様化しているけれども、価値観はそれほど多様化してないということですね。

今のとくにニートの世代、世代と言つていいか分からないですけれども、一五歳から三四歳までくらいというのは、ちょうどバブルの頃とか、バブル後のいわゆる「失われた十年」という時代に多感な時代を過ごしていて、彼らはそういう、ものすごく豊かで選択肢も増えた中で、どう生きていくのかという問題に、人生の最初の段階でぶつからざるを得ない。それは過去のどの世代も経験したことのない、初めての世代じゃないかと思えるんですけれども。

二神 「こんなことやつてみないか」と言つと、「二神さん、それは意味がないよ」みたいな返事がよく返つてきて、ああ、そうか、彼らは、仕事をやる意味みたいなものを初めて考え始めた世代なのかと思うわけです。僕らは自分のえさ代を稼ぐために否応なく働か

ざるを得なかったわけ。豊かになった成果だと思っ
て、そこに対して、大人がうまく答えられて
いないというか、そういうギャップみたいなものが生
じている。そこにニートみたいなものが生まれやすい
社会構造ができたんじゃないかなあという感じがして
いるんですよ。

玄田 ニートの問題は大人の問題じゃないかって思
うのは、『働くということ』なんていう、日経新聞社
が出した本がものすごく売れたりするくらい、大人も
働く意味を失っているから。さっきリストラの話をし
たんですけど、リストラされた人って、再就職が苦し
い。でも本当に苦しいのは、転職するときに「あなた
はどんなふうに働いてきたんですか」って聞かれて、
自分なりにささやかな誇りをもって、私はこういうふ
うに仕事をしてきたつもりですとか、働いてきました
って、自分の言葉で訥々と語れるものがない。だから
やっぱり苦しいんです。意味を問わなければいけない
のはほんとうはわれわれであって、われわれが自分の
ことと働く意味について考えていないのに、それを子
どもに言ったってダメなんです。

二神 僕は六一歳になったんですけど、四国の田舎

の進学校にいたもんで、結構、同級生は一流大学を出
て、一流企業に勤めて、ここしばらく続々と退職して
いるわけです。僕から見ると、中学高校時代、非常に
面白かった男が、銀行やマスコミに三十年勤めると、
本当に惨めなぐらいつまんない男になってる。

玄田 偏見だ(笑)。

二神 いや、僕の友達に限ってです。高度成長の時
は、仕事の意味を考えるという思考を捨てて、ひたす
ら会社のために働くみたいな部分で、自分をなくして
しまったんじゃないか。我々の世代は、若者にそうい
う人間として貧しい働き方しか伝えられなかったとい
う感じがある。だから、いま働かない、あるいは正社
員にならない形でいる人達というのは、今の日本の働
き方について、どこか引つかる部分があって、その
引つかる部分というのは、世の中を良くしてゆく何
かにつながるのではないかと、そういうふうに僕は思
っているんですよ。

玄田 それはすごく感じますよ。僕らも上手にそら
して、働く意味を考えないようにして生きているん
です。考えたらしんどいから。

●ちゃんといいい加減に生きよう

玄田 ニートから教えられることって沢山あって、ニートについて考えるようになって、ボクも「ちゃんといいい加減に生きよう」ってすごく思うようになりました。

吉本興業の横澤彪さんの話をよくするんですが、ふつう新人研修では「これからあなたは社会人なんだから、いろんなカベにぶつかっても、頑張って乗り越えなさい」と言うんですが、横澤さんは「カベにぶつかっても、絶対乗り越えられない」とはつきり言うんです。学生時代の常識や能力くらいで乗り越えられるほど社会は簡単じゃないんだと。じゃあどうすればいいのかというところ、「ちゃんとウロウロとしてろ」と。ちゃんとウロウロとしてれば、ある日突然カベにぽっかり穴が空いたり、ある日突然ヘリコプターに乗って誰か助けに来たりするからと。

ちゃんとそういうことを言える大人になりたいと思う。仕事とか働くっていうのは、ものすごく矛盾してるんだけど、その矛盾は矛盾として、案外悪くないっ

てことを、どうやって伝えていくかです。

司会 若い人たちに取材すると、ものすごく切迫感をもって今の状況を脱したい、働きたいと思ってる人もいるけれど、何が彼らの足を止めているかというところ、「恐怖感」なわけです。今の競争社会の中で生きていけるかどうか自信がないし、そもそもそのサバイバルゲームに参加するべきなのか、参加してがんばったところで自分は幸せになれるのか、そういうこと自体に疑問を感じているニートの人たちにも出会います。

玄田 競争社会に疲れている傾向は強まっていると思う。そこで横原敬之さんの「世界にひとつだけの花」という歌が出てくるんですが、競争してナンバーワンにということは卒業してもいいと思うんだけど、じゃあオンリーワンになれば幸せなのかということがある。世界にひとつだけの花って、花屋さんの店先に並ぶまでに、その花にはどんな涙ぐましい努力と、ポキンと切られない運があったのかと考えると、実はオンリーワンになるのだから決して楽じゃない。

司会

もっとしんどいかもしれないですよ。

玄田

だから僕は、ナンバーワンもオンリーワンも

目指すなど。というのは、今、みんながナンバーワンやオンリーワンをめざしているけど、その後ろでお節介を焼いてウロウロしてくれるような人が本当は必要なんです。昔だったら商店街を「どうしよう、どうしよう」って走り回っているような人がいて、「ちよつと落ち着け」なんて言われてね。そういう後ろでウロウロしている人がいると、救われるし、言いしれないファイトが湧いたりするんですよ。もしかしたら、そういう、自分のペースでウロウロしている人のほうが、本当に今一番必要とされているのかもしれない。ニートの人たちの将来っていうのは、ナンバーワンでもオンリーワンでもない、そこに別の生き方とかスタイルとかを作っていくのかもしれない。それは分からないですけどね。

●スローワーク

「自分の仕事の成果をしみじみ味わえる働き方」

司会 二神さんは、ニートが日本を変えていくんじゃないかと。引きこもりには引きこもりの健全性があるし、ニートにはニートの健全性というか正しさがあ

って、それをかれら自身が実は認識していないところが問題なんだっておっしゃってましたよね。

二神 引きこもりには健全な若者が多くて、自分が悪いとひたすら思い込まれていると言いますか、自分のプラス面をあまり見ないので、そうじゃないよということ、なんとか伝えたいと思ってるんです。

今、世界で一番子どもと若者に元気がないのは日本じゃないかという気がするんですよ。最近、うちの若者がカンボジアに行つて、カンボジアの貧しい子どもたちの目が生き生きしているのに彼らは非常にショックをうけた。それは何なのだろうと。今みたいな働き方で資源をたくさん消費して経済的な繁栄を続けてそれで地球の環境はもつのかと。それを根源的に問い直さなければいけない時が来ていて、それを彼らは薄ぼんやりと感覚で感じて、何か生産拒否症候群のようなものに陥つて、今、動かないでいるのではないかと。そこをですね、もう一度、「お前たちはひどくないことに気づいているんだぜ。ここから新しいものを作ろうじゃないか」という具体的な提案を、我々はやっていかないといかんなど。オンリーワンとかナンバーワンとかじゃなくて、ただの人として、自分のペース

で、こういうふうになるとお年寄りが喜んでくれたなとか、こういうふうに一生涯命作ったからこの花がきれいに咲いてくれたとか、自分がやった仕事の成果をしみじみ味わえるような働き方、そういうのを僕はスローワークというふうに名前を付けたんです。

もつと人間に優しい日本にするために、せつかく芽生えたニートみたいな感覚を、とりあえずバイパスからのスタートだけでも、バイパスが徐々に主流になる場合もあるじゃないかと。だから今の社会に適応することだけを考えなくてもいい、新しい道をつくろうじゃないかというのを、我々の世代が最後にやり残した仕事のような感じでね、お節介を焼いているところですよ。

●ちよつとお節介な大人になる

司会 それでは、三番目の、ではどうしたらいいのかといったことについて、お話をしていきたいと思えます。玄田さんはニートの予防策というようなことで、十四歳、中学二年生の就業体験を全国一斉にやったらどうかということを提案していらっしやいますか。

玄田 その話をする前に、何のために〈変える〉べきなのか、という前提を考えることが大事だと思う。

よく言われるのは、労働力不足が進み、社会保障制度が維持できなくなる、だから若者には働いてもらわないといけない、若者が働くように変えるべきなんだと。でもこれではダメです。「そうか、労働力不足か、年金制度が維持できなくなるか、じゃあ俺働く」っていうニートはいない。それは女性の問題も同じで、出生率が一・二九になったと、これじゃあ日本がダメになる、だから女性には子どもを産んで欲しいって言われて、「じゃあ私、産む」って人はいない。

僕は、ニートも働いた方がいいと思うし、働くように変えるべきだと思うんだけど、なぜそう思うかというところ、この人たちは口ではどう言おうが、本心では働きたいと思ってるからです。そのために何が必要かというところ、外部からの働きかけが必要なんです。

そこで僕がどういってお節介を焼こうと思ってるかというところ、ちよつとした軌道修正をしてあげよう。どういう軌道修正かというところ、個性や専門性や目的、自己実現も大事なのかもしれないけど、それよりも、どうやったら生きていけるかということが大事なの

は、ちゃんと「ありがとう」と言えることだけだと。学生にいつも言っているのは「一週間、自分で何回人にありがとうと言っているか数えてみるって。数えたらその一・五倍『ありがとう』と言う練習を密かにする。すると自分の中で絶対チャンスが増えるから」って。逆に言えば、ありがとうと言わなかったことで失ってるチャンスはたくさんあるよって。

次に、職場体験の話。『ニート』の本の中で十四歳の職場体験を紹介していますが、高校卒業予定者じゃ遅い。十四歳の頃に、親でも先生でもない違う大人と出会って、一週間でもいい、同じ空気を吸って、ちゃんと挨拶さえできれば、自分でもちょっと努力すればなんとかなるなあという実感を持たせたいんです。

全国の一二〇万の中学二年生が十一月の第二週、月曜日から金曜日まで、仕事を通じてやりたいことをする一週間にしたい。なぜ十一月かという、学校の先生に教えてもらったんですが、十月までは学園祭や運動会があつて、十一月はちょうど空白期で精神的に不安定になると。言ってみれば大人と子どもの境界のよくなる時期で、そのときに世の中にはこんな大人がいるのかって、その大人と出会うなかで本当に基本的なこ

と、挨拶でもいいし、仕事中はあくびを我慢するとか、それさえできれば、なんとか生きていけるんだということを実感させることが大事だと。それでニートや引きこもりが減るかどうかわからないけど、何かは変わると思う。そのためには、マスコミなどのいろんな協力もいるし、できれば鉄道会社が一週間無料パスポートを出してくれるとやりやすい。兵庫県は公立中学校三百五十校で四億五千万円使って十四歳の職場体験をやっているんですが、そのほとんどが電車代ですから、JRや私鉄会社が「一週間くらい面倒みたるがな、無料パス出しまっせ」って言うってくればできるんです。

基本は、世の中に点在している、心ある、お節介で調子のいい、いい加減な大人たちが、「一週間くらい子どもの面倒見てやるか」ということ。それが一番欠けている。『ニート』の本を書いて一番救われたのは、「自分でも何ができるのかって考えました」っていう感想を何人かからいただいたことで、ここに可能性があると思う。

二神 うちは二十代の若者が多いんですけど、体験不足といえますか、僕は人間体験、社会体験、労働体験と言ってるんですけど、まず大人との出会いは親と

学校の先生、社会といっても学校と自分の家庭しか知らないまま二十歳を越える若者が非常に多いわけです。もちろん労働体験もない。そういう意味で、十四歳の職場体験については、「いいことですねえ」と言うしかない。なにやら奥歯に物が挟まってるんですけど、僕は子どもに夢をもたせるといふ教育プロジェクトにいろいろ絡んできて、たしかに感動的なことが起こったわけです。これで世の中が良くなるのかなあと期待させてくれたプロジェクトがいっぱいあったんですが、結局何年か経ってみると、それが一つのガス抜きでしかない。やっぱり終わってみると底流はどんどん悪くなる方向に行ってしまったみたいなね。そういう思いがあるので、ほくはこれは玄田さんの第一弾であって、もっと大胆なのが次から出てくると思って。

司会 十四歳の職場体験と、ニューススタートでやっている仕事体験塾というのは、どこか重なる部分もあるように思っただけです。

二神 仕事体験塾は、だいたい平均すると一年半くらいやるわけですよ。やはり仕事そのものを覚えるというよりはいろんな人とふれあうと。例えば、喫茶店に初めて来た子はコーヒーマシンの淹れ方を先輩に習わない

といけない。料理もやっぱり料理のプロの人が来ると教えてくれるわけですよ。そういう人とのふれ合いのほうか、はるかに彼らが社会に出ていくときの力になるなあという感じがあるんですね。その部分では、ただ単に職場体験じゃないんだと、玄田さんの話を聞いて急に思いついたんですけど（笑）、「ありがとうございます」とふつと言え体験みたいなものも、いろんな段階で必要だということです。

もう一つ思うのは、これに学校が絡んでるのは残念やなあというかね。僕はもう学校はその間はすっぱり手を引いてね、地域に子どもたちを全部投げ出して、「さあ、地域の人たちが、なんとか子どもたちを育ててください」と。そこで地域がどういふふうか答えるかというところまで徹底してやっていく必要がこれからあるんだらうと。学校と文部科学省が絡むと、最終的には中途半端なものにしかありません。

玄田 あんまり意見が合ってばかりだと盛り上がりなくなりますが、反論を少ししておくとね、最終的にはやっぱり地域なんですよ。それは間違いないんだけど、先生を応援しなければならぬという現実はある。うまくいくためには、学校の先生がどれだけ地

域に心の底から頭下げて歩くか、もつと言えば、校長先生が、なにか事件があったときに腹くくってやってるか、ということが大きいんですよ。

文部科学大臣が最初の挨拶で何を言うかというところ、問題教師をいかに排除するかという話ですよ。だけどそれも行き過ぎると、すべての先生が問題教師みたいな感じになる。今、社会全体が先生を馬鹿にしすぎなんです。親のほうが生より学歴が高くて偏差値の高い大学を出ていけばね、先生を平気で馬鹿にするんです。そりゃ子どもも馬鹿にしますよ。先生にもいろいろ問題はありますが、逆にその分、先生に教える気持ちも含めて、地域がまず先生を応援しようとしなければ、絶対変わらない。

●仕事と家庭と遊びでバランスをとる

玄田 もうひとつ、十四歳の職場体験で僕がいいなと思ったのは、「働いてみて分かったんですけど。大人の社会って、働いている間の休憩時間じゃない休憩ってあるんですね」と。これすごく好きなんです。「おまえ、いいとこ見とったな」と。昔から伸びしろ

がない人間は伸びないって言ったように、今、社会全体で何が足りないかというところ、遊びが足りない。いっぱいいっぱいになってる。話がずれちゃうけど、僕、仕事と家庭（個人）を両立させると言うワークライフバランスという言葉が本当に嫌いで。仕事がかけたら家庭もこけるし、個人がかけたら仕事もこける。二つのものをバランスとるのが難しいんですよ。だから、大事なものは三つ持つことです。一個くずれそうになっても、残りの二つが支えてくれる。三つ目は広い意味での本気の遊び。自分の三番目の居場所になるような遊びを、それぞれがちゃんと考えないと、絶対に苦しい。

●一本のレールに戻そうとする支援策では足りない

司会 政府が今出している対策をこの間取材して、十四歳の職場体験とか小学校からのキャリア教育、二トの人たちの合宿型の仕事体験みたいなものだとか、あるいは、インターネットを通してビジネススキルや知識や資格の習得を支援しようとか、いろんなメニューが出てきていて、それ自体は二トの存在が無視されるよりはずっと前向きでいいとは思っています。

が、やはり、こうした政策はどっちかというとレールが一本あって、つまり、まず学校をちゃんと出て、できれば正社員として就職するのが真つ当で正しい道だというのがあり、そこから外れた人たちをなんとか支援して、元のレールに戻そうという支援がメインじゃないかというふうには思えます。でも、レールが一本しかないままで、そこに戻そうというのは、適応できない人もたくさん出てくるのではないか。二神さんはそれで、スローワークというものを提示されているわけですよ。

二神 ニュースタートは三点セットで対応してきて、やっている間にそれでは足りないことを痛感したと言いますか。今の社会に適應できないというふうには石臥さんはおっしゃったけれども、どうも若者たちを見てみると、自分の意思で適應しない若者がかなりいるなど感じるんですよ。

例えば、福祉ですら相当効率的な働き方を求める現場があるわけですよ。若者たちは、素朴にお年寄りの手助けをしたいとか、子どもたちを預かりたいとか、そういう気持ちで現場に入っていくんだけど、いかに能率的に仕事をこなすかという要求をしている現場が

非常に多いわけです。そうなる人たちまちはやめてしまおう。

そういう若者、自分が仕事をやっているやりがいみたいなものを、仕事の現場で感じたいと思っている若者の割合がかなり高くなっていて、その意味では、今の効率優先、一直線の仕事現場で彼らが全部収まるかというところ、やはりそうではない。もつといろんなバイパスみたいなものがいっぱいできて、給料が低くていから、自分はゆつくり子どもの相手がしたいとか、介護もやりたいとか、農業もしたいとか、そういう多様な道がこれからできないと、多分うちの若者なんかは収まらないだろうなあと、いま非常に強く思っています。

ですから、スローワークという言葉を提言させていただいているわけですけど、それはもう少し多様な働き方、もちろん、能率的な社会でゴリゴリ働きたい人は銀行やマスコミで頑張っていたらいて、違うスローワークの現場を具体的に作っていく必要があると我々は考えている。政府はそういうことには取り組まないだろうから、民間のお節介な大人がですね、死ぬ前にもう一回社会のために余分な仕事をする必要がある

るんじゃないかと思っっているのです。

司会 お節介なおじさんの二神さんにうかがいますけれども、スローワークというのを、具体的に、どういうふうにイメージしてらっしゃるんでしょうか。

二神 四年前からデイスリーブスという介護をやっているんですが、開けてみると非常に評判が良くて、順調に運営しているんですね。うちの若者はお年寄りを本当にせかささない。お年寄りの食事につき合うと大変ですよ。なかなかのみこまないしね。のみこむ時間もつたないからと、流動食だけ出したりするホームもあるわけです。ところがうちの連中は悠々と待てるわけです。お年寄りにすれば本当に安心できるわけですよね。そういうところで、スローワークで才能なんだと思うんですよ。その才能をもっと活かすことが、日本をもうちょっと、多様な人間に優しい社会にすることができるはずだと。

ただ、経済的にもっと豊かに、という前提ではスローワークは難しいと思うので、もう少し貧しくなっても心の豊かな生活はあるし、少しずつみんなが貧しくなりあうという了解点に立てば、スローワークというのは十分に成立しうると考えているわけです。

●五〇%の自立・五〇%のパラサイト

司会 「遅い」ということも才能の一つだということですけども、ただいきなり今現在、世の中を支配している市場経済みたいなものと無関係に生きていくことはできないわけですよ。その辺のかねあいはどうなんでしょう。

二神 今、千葉県市川市でほぼ百人ほどが、大家族をつくって暮らしているわけですけど、「個人で、あるいは核家族で自立しなければ」みたいな呪縛を取り払ってしまうと、そんなにお金がなくても楽しい生活ができるよというのをこしばらく実験してみても、これはやれるなど。ニュースタートに来ると、一カ月三万円あれば、楽しく暮らせるようです。これを日本中にたくさん作ろうと。大家族がうつつとうしいときもありますから、「一時的な緩やかな大家族」と言っているんですけど。市場経済からちょっと距離をおいた形で、成り立っていくことが可能なんじゃないかという実感があります。

司会 若い人たちも「自立しなければ」というプレ

ッシャーはすごいわけですよ。そういう「自立」を
目指さなくてもいいんじゃないか、スローワークでは
それも可能にしてくれるんじゃないか、そういうふう
にとらえていいんじゃないか。

二神 僕が若者に「人間は一番自立に向かない動物
だ」といつも言うんです。僕らの世代は社会の状況が
良かったから経済的自立はできたけれど、魂のほうは
会社にすっぱり依存して、僕のまわりには、一人とし
て自立したやつはいないというのが、僕の結論なわけ
です。そういう世代が若者たちに「自立しろ」と言う。
僕は今の若者たちは、パラサイト世代だと見ているん
です。親はだいたい家を持って、年金もバツチりもら
っているから、遠慮なくパラサイトしたらいい、「五
〇%自立・五〇%パラサイト」でいけど若者たちに話
しているわけです。親の財産を若干あてにしながらほ
どほど稼いで、自分のペースで、自分の好きなことを
やるみたいな新しい働き方。ちなみにうちのNPOも
毎年膨大な赤字ですけど、僕の八五歳の母の送金でも
っているわけで、僕への送金が母の生き甲斐になって
いて、僕は母親の生き甲斐を支えて、赤字を順調に出
し続けつつも、やっぱりやりたいことはやらせていた

だいている。それでいいんだと思うんですよ。うちは
パラサイトNPOであるし、二神はパラサイト五〇%、
自立五〇%で生きている六一歳でしかないわけです。
僕自身は、一人前の大人になろうとあがいた末に、半
人前の大人にしかなれなかつたけど、半人前の人間で
も何かできるということを、若者に伝えたいわけです。
司会 でもその、頼りになる財布がなくなつてしま
うとどうなるんですか？

二神 それは、そのとき別のパラサイト相手を探せ
ばいいわけです。日本はお金の使い道に困っている老
人だらけの国ですから。少なくとも、国の年金制度よ
りは展望があります。

●二ト問題の解決はあるのか

司会 そろそろまとめに入りたいのですが、玄田さ
んからは職場体験を中心に二トの予防策ということ
でお話しいただいて、二神さんからはスローワークの
お話が出て、いろんな方策があるということですが、
こういうことをやっていけば、二ト問題はいずれ本
当に解決するんでしょうか。

二神 僕はずっと教育とか若者にかかわる仕事をし

てきて、これまでいろんな教育プロジェクトに絡んできたんですが、不登校や学級崩壊、いじめ、学習障害などいろんな問題が起こると、対策委員会ができたり、民間ではいろいろなフリースクールができてきたり、いろんなところで努力がなされてきたわけです。ところがどんなに健気に努力しても、バラバラに対応してはさっぱり問題の本質に近づけなくて、気づいてみると全体としては悪い方向に流れてきてしまった六〇年間だったような気がするんですね。

ですから、今回「ニート」という、非常にいい加減ではあるけれども、幅の広い考え方が出てきた。「ニート」というのは「Not in Education」ですから、不登校の問題も当然そこに含まれます。引きこもりやニート、不登校などの問題、いろんな問題は実は奥の奥でつながっている。その一番奥の奥にあるのは何なんだというところを見極めて、そこに迫っていくことを本気で考えないといけない危機的な状況がきているし、もう個々の問題への対応では前進しないのではないかと、という気持ちには僕には非常に強いわけです。そこで、僕自身は、スロウワークの総合的現場としての福祉雑居

村を作っているわけです。

司会 玄田さん、その点、いかがですか？

玄田 さつき緩やかな大家族とおっしゃったこととつながると思うのですが、僕は、いろんなわけのわからない存在と、どう緩やかにつながるかということがむしろ問われている気がする。「仕事のなかの曖昧な不安」（中央公論新社／二〇〇一年）の中で「わけのわからない人間と、うすく広くつながっておけ」と書いてたんですが、うまく転職したり独立するのは案外そんな人だと。全部自分でやっている人なんてほとんどいない、たまにしか会わないくらいのゆるやかな緊張関係と信頼関係でつながっている人間関係をもっている、そういう人のほうが有利に生きていけると。

それから、逆説的だけど、本当に分かり合うためには、お互いのことを自分は「わかっていない」という気持ちを持つことも大切になる。夫婦でも恋人でもどんなに長くつき合っても、相手に分らないところがあるという気持ちを持ち続けないと、お互いに対する尊敬の気持ちとか礼儀とかが絶対に失われていく。だから、ニートはわけの分らない存在でいいと思う。そのわけの分らない存在と、どう緩やかにつ

ながる生き方があるのかを考えたほうが楽しい。だからニート対策じゃなくて「ニート祭り」ぐらいのほうがいいんです。

司会 「ニート祭り」やりますか。以前、玄田さんとお話ししたときに、若い人たちの問題をこっそりとまとめて担当する特命大臣みたいなのが必要じゃないかとおっしゃったような記憶があるんですけど。

玄田 行政にもちゃんと本気でお節介を焼くようなお調子者がいないとうまくいかないよと。いま若者自立挑戦プランに八〇〇億円もかけるんですが、真面目すぎると、きつとうまくいかない。

あ、でも言うっておかなくちゃ。「ニート祭り」はNPO法人育て上げネットの工藤啓君のオリジナルです。僕はパクリの玄つて言われるんです（会場笑）。けど、「みんなのことまんべんなくバクってるんで、これを人はオリジナルと呼ぶんだ」と（会場笑）。薄くいろんな人とながつて、全部バクれば、それはそれでオリジナルになるんです（会場笑）。

●悩んでウロウロするのは全然悪い事じゃない

司会 最後にキーワードみたいなの、あるいは、今日言い足りなかったことをうかがいましょうか。

二神 希望を語りたいところなんですけど、僕も人生で何度もどうにもならんときもあつたし、三〇歳過ぎてどうにもならんこともあると思うんです。そういう人も当然楽しく生きられる仕組みもあつてしかるべきだということをいつも考えていてですね。今も、うちには家出妻とか倒産夜逃げ社長とか、いろいろな人が来られて、スタツフとして元気に働いていたでいていますが、もうどうにもならんなと思つたら、ニユースタートの雑居福祉村に来ていただければなんとかなりますから、皆さん、安心してニートでもフリーターでも続けていただきたい。雑居福祉村を世界八十八カ所に作る構想も、今は行政を巻き込んで着々と進んでいます。世の中で困っている奴みんな来い、俺も困っているけど、なんとかなるさ、そんな福祉雑居村です。

玄田 僕は本当に「ちゃんといい加減に生きる」と

か「ちゃんとお節介に生きる」というのが、実は二ト問題のキーワードじゃないかなと思っていましたけど、二神さんの話を聞いて、それが再確認できてとてもよかったです。

僕はよく学生になんで大学の先生になったんですかって聞かれるんですけど、答えが思い出せないんですよ。ただ、大学の先生は無理かもしれない、でも大学院に行きたいって、へろへろになるくらいに悩んだ。こんだけ悩んだらどうなってもいいくらいの気持ちになると、後から何が起こっても、しょうがないって開き直れるんですよ。それが、スローなワークとかスローに生きるということにつながれば、悩むということとは全然悪い事じゃないと思うし、そこでウロウロすることは、後から考えると、とても楽に生きられるっていうことになると思うから。今日はとても楽しかったです。どうもありがとうございます。



からだで感じるエンパワメント 自己防衛プログラム WEN-DO初心者向けワークショップ

Wen-doは自分の力を実感し、自分に自信を持てるようになるプログラムです。表情、口調、ボディランゲージ、声の大きさ、抑揚など、相手に影響を与える効果的な方法を練習して、相手からの攻撃をそらしたり、最小限の力を使って自分の身を守る方法を学ぶことができます。初心者向けワークショップ（3時間コース／15時間コース）には、地域で活動している女性グループ、学校、女性センターなど、10歳以上の女性であればどなたでも参加できます。

- 内容 自分を守るために大切な考えや情報の提供、女性への暴力についての話し合い
実技：パニックを防ぐ呼吸の方法・声の出し方／手や腕をのはずし方
はがいじめにされたとき、首をしめられたときの対処法
手と脚を使った防衛法（3つの手の動き・脚の蹴り）
ひしを使った対応法／防衛の方法 など

※時間・対象年齢等によって内容はかわりますので、詳細はお問い合わせ下さい。

Femix

フェミックス

フェミックスは出版とフェミニストセラピーによるカウンセリングを事業の両輪としています

◎お問い合わせ・お申込みはフェミックスまで。
電話、電子メール、あるいはファックスにてお問い合わせ下さい。

東京都世田谷区池尻3-2-3-703 (〒154-0001)

TEL/FAX 03-3424-3603

E-mail : info@femix.co.jp URL : <http://www.femix.co.jp>

一步を踏み出す勇氣と他者への想像力をもって

— 学校現場に内心の自由を求め、「君が代」強制を憲法に問う裁判（北九州ココロ裁判）

竹森 真紀

（北九州がっこうニオン・うい）

■学校「民営化」も夢ではない

今、小泉内閣はなりふりかまわず「郵政民営化」を急ぐ。これは、徹底した合理化以外のなにものでもなく、人件費の削減と効率化が追求され、これに伴う労働強化で労働者は、事実「死」を余儀なくされている。日本郵政公社が「深夜勤」と呼ばれる制度を導入した今年二月八日から今日まで、全国で少なくとも三〇人以上、東京だけで一九人が死亡しているという。誰も死にたくて死んだ人はいない。仕事をするのが当然

り前だから、決められたとおりに、責任感を持って働き続けただけの結果なのかもしれない。しかし、死ぬまで黙って働くとはどんな過酷さなのか、今、私たちは立ち止まって想像しなければならぬだろう。

冒頭からシビアな話となって申し訳ないが、ここ数年の学校教育の変わり様は、この「郵政民営化」という合理化に伴う、現場を顧みないままのトップダウンの政策とあまりに似通っているからだ。

今、学校は「教育改革」の名の下に、あらゆる安上がり教育と差別の再生産のためのようなシステムが導

入され、教員はただただ追い回され、「平和」や「人權」を語る余裕などない。これまで身につけてきた教員としての資質や技能がほとんど意味をなさず、中高一貫教育だ、総合学習だ、開かれた学校づくりだ、パソコンだ、英会話だ、習熟度別学級だと、さも新しいかのような教育システムに追いたてられている。さらに教員はそれらをきっちりこなせているかどうかを、校長はじめ保護者や地域住民からまで「評価」される対象となり、ノーとは言わずに必死で自分の身を守ろうとガンバルーそれが決して目の前の子ども一人一人のためのガンバルではないことで、精神的にも疲弊していく。事実メンタルな病休者も多く、そのままでガンバレば過労死は目前なのだ。

そんな時代が来るなんて、ほんの二〇年前、だれが想像しただろうか。しかし一般には、教員はじめ公務員への世間の目は厳しく、不況期の今では安定した生活を羨まれ批判が大きいことも現実で、今述べたような実態はほとんど知られていない。実際はどうなんだろう。そんな疑問に答えるべく私たちの歩んできた道を振り返ってみよう。

■二〇年前に始まった北九州市の「君が代」処分

私たちココロ裁判の原告ら（現在一九名のうち、学校職員一人以外は教員）は、すでに二〇年近く前、卒・入学式の「国歌斉唱」時に黙って座っただけで学長の職務命令違反として処分された。

たった四〇秒間の労働時間のことだから、とりあえず「起立」しなければ、四〇秒間以外の教員としての自由や権利は保障されたのだろうか。決してそうではない。「起立」すれば「起立して斉唱すること」という命令に従ったことになり、校長の命令にすべて服従しますという「踏み絵」を踏まされたことになる。

四〇秒間の「起立」がすべての教員生命を売り渡すことであつたと言っても過言ではないと、二〇年が経過してそう思える今の私たち原告である。

既成の労働運動が力を失って久しい。戦後労働運動の歴史をひもとく力もなく主観的になるかもしれないが、戦後の労働運動が真に一人の労働者を救うべく闘わずして、「はじめに組織ありきの労働運動」であつたことは否めない。

それでも日本教職員組合はそういった既成の労働運動の中でも「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンの下、その先頭を走ってきた。今でも教員組合と言えば日教組という名前が浮かぶ人がほとんどだろう。そして、私たち原告ら自身が所属していた福岡県教職員組合は、その日教組の中でも御三家と言われる先進的に「闘う」組合であり、一九七〇年代前半までの管理職試験反対闘争などは実力で抵抗をした。しかし、この闘争において刑事弾圧を受け、運動は一気に収束していく。そして、福教組をねらい打ちして組合つぶしを実行したのが、あのリクルート事件で名の知れた。当時北九州市教育委員会教育長の高石邦男であった。多くの被処分者を出した福教組は、財政的にも「処分を出さない闘い」へと運動の転換を迫られたのだろう。

当時、処分された組合員を救援することなく、跳ね上がりとして排除していく構造が、一人の人間としての闘いのエネルギーを失わせ、つまるところ組織としての闘いの勢いすら失わせることに気づいていたかどうかは分からない。しかしそのことが、この「君が代」処分への対応にもはっきりと投影された。

私たちはこのような既成の労働運動に見切りをつけ

た。その決断は、今思えば軽やかなもののように思えるが、できれば組合に助けてもらいたかったし、大きな組織やたくさんの仲間や支援が欲しかった。ほんの少数で声を上げることには大きな不安があったことも事実だ。が、さらにそれを上回る私たちの小さな勇気と熱意があった。

今、私たちが少数でものびやかに闘い続けてこれたのは、既成の組織では聞えないことを身をもって知った挙げ句の闘いのスタイルゆえかもしれない。すべてが初めての経験であり、一人一人の怒りをバネに、柔軟な発想に頼るしかなかった。

北九州市で組合弾圧を実行した高石邦男は、文部官僚となり、一九八五年全国一斉の初めての「国旗・国歌実施調査」（いわゆる「君が代」徹底通知）を実施した。なぜ、北九州市で早くからこのような「君が代」の強制がなされたかは、この高石邦男によるところが大きく、その後北九州市と文部省のパイプはさらに太くなり、つい三年ほど前まで北九州市の教育長はすべて若手の文部省キャリアであった。

そういった曰く付きの「徹底通知」を受け、北九州市では「四点指導」（詳細は別途）といわれる指導の

もと、卒・入学式の「君が代」斉唱時の「着席」が校長らによってチェックされ始めた。「着席」行為が教育委員会に報告され、嚴重注意・文書訓告と制裁がなされた後、戒告処分という地方公務員法上の懲戒処分が出されていった。その過程で処分のための教育委員会の事情聴取が行われる。

当時、教育委員会から呼び出されるといふことが、一人の教員⇨労働者にとつてどれほどのプレッシャーであったか。私たちは内心ドキドキしながらも精一杯のつっぱりで、「完全黙秘」で教育委員会の思惑を外すことに成功した。「今後はもうしない」という一言が欲しかったであろう教育委員会は權威を失った。彼らにとつてはお上には従順であることが当たり前なのである。良心を曲げることなく事情聴取から戻った当事者は、最低限の自分の尊嚴を保つことができ、誇りに満ちた笑顔で戻ってきた。その後教育委員会は呼び出すことを止め、わざわざ学校に向き私たちの顔色をうかがうようになった。

このような小さな闘いを積み重ねた結果、現在は第三者の立ち会いを公的には認めないながらも、開かれた庁舎の食堂で、立ち会いい人として原告ら何人かが見

守る中、当事者の言い分をていねいに聞くという姿勢にまで変わってきた。

今原告らにとつての「処分」は、不適格のレッテルではなく、自分自身の良心の証となっているかもしれない（実損は取り戻せないままだけれども）。

■本人訴訟は楽しい

——学校現場に内心の自由を求め、
「君が代」強制を憲法に問う裁判

当時、法的にも全く無知といえる私たちが地方公務員法上の不服申立をしたのは、「黙つて座つた」だけで懲戒処分という謂われない処分に対して、とにかく不服（異議）申立をするしかないというこの一点から、これが、現在係争中のココロ裁判で行っている本人訴訟の始まりといえる。

人事委員会審理の代理人は弁護士でなくてもだれでもなれるということもあつて、私たちは申立人と同じ気持ちでみんなで代理人になり、初めて法的な審理の場へとデビューした。

私たちは正面から処分庁である教育委員会と向き合

うため、あくまで公開された審理を求め続け、第一回の審理開催まで二年ほどかかった。

審理が開かれると、「出席できる代理人の数」「傍聴人の腕章」「準備書面の口頭での読み上げ」といった一見審理とは無関係と思えるようなことで争い、審理は再三打ち切られ審理長が退任したりもした。

しかし、そういった不毛とも思えるやりとりが、申立人と人事委員会との力関係を大きく左右し、自分自身の力で押し返していくことの大切さを身をもって知った。行政組織の前に、何ら後ろ盾もない、処分されただけの一個人は無力で、スタート時点で負けている。「初めに答えありき」の審理で、不当な処分をはねかえしていくには、そういう一つ一つにこだわり、退かないという姿勢を見せつけることで、力関係を変えていくしかない。私たちは、繰り返し繰り返しこだわり続けてきた。

そして、この人事委での経験があったからこそ、弁護士なしの本人訴訟に踏み切れたし、一七名という原告団の数に、多少勇気づけられ、結果に期待しない覚悟で法廷を築しむことができた。

私たちの着席行為が「厳粛な卒入学式の雰囲気」を著

しく減殺させた」とは人事委の裁決書の文章であるが、裁判所もまた権威で保たれた厳粛なところである。公正な審理がなされるべき裁判所ではあるが、今さらそんな幻想は持てない。私たちは一人一人の生のままの声をぶつけていくことしかできなかった。

裁判所に一度でも行かれた方はお分かりだろうが、法廷の始まりには「起立」の号令がかかり、傍聴者にも「起立」を強制的に促すところが大半だ。が、私たちはまずその「起立」をせずに法廷を始めることにした。それ以降、私たちの法廷で「起立」を促されることは全くなく、それどころか裁判長自ら号令を止めさせるムードすら生まれた。「起立を強制されない」というだけで、どれほど法廷での気持ち安らぐことか。一歩、裁判所との距離が縮まり少しでも同じ目線に立つて向き合えそうな予感もできた。

その後、私たちは法廷で原告一人一人が口頭で陳述をし、準備書面を読み上げ、被告への釈明を求め、裁判所へ判断を迫るということを自分たちの言葉でなす努力を続けた。その結果が九六年一月提訴から今年の一〇月一二日の弁論で三二回を数えることとなった。一口で三二回と言っても来年一月の最終弁論まで

足かけ一〇年である。振り返れば長いが、裁判所からいつ「結審」を言い渡され、証拠調べやこれ以上の主張は必要なしとされるかもしれないので、私たちにとっては毎回の弁論が勝負であり、その短い裁判所や被告とのやりとりに緊張感も高まった。自分たちのペースへと巻き込んでいくための準備や主張が必要なのだ。

また、口頭弁論と言いながらも、書面主義であり、主張は準備書面としての提出が不可欠である。そういった書面作りをはじめ多くのエネルギーを要するが、裁判という手段が有効なのかどうか、それは分からない。しかし、この国の司法に幻想を持たず、高い敷居を少しでも低くして、法廷を原告の声で埋め尽くすことに意味があると考えている。

今の裁判所のシステムで、法廷の中でどれほどの生の言葉が交わされているかといえば、否である。裁判所に対しては、まず原告の声に耳を傾けさせるところから始まり、私たち原告に対する裁判所のバイアスを取り除きながら、ありのままの被害状況を訴え続けなければならぬ。それは、絶対に書面だけでは表せない、原告の表情であったり、声であったり、生身の人

間のやりとりに表される。私たちは裁判にそれを求め続けたと言っても過言ではない。

裁判所は三二回という弁論の中できつとそれを感じてくれたに違いない。

■なぜ、独立組合か

―北九州がつこうユニオン・うい―

裁判は「お上」に訴えることのできる司法という場での一手段である。労働者として権利を主張するためには労働運動が不可欠であり労働組合の存在なくしては聞えないと確信しているが、既成の労働運動に寄りかかっていても何も生み出せないことは既に述べた。私たちは「君が代」処分を聞わない既成の労働組合から独立して、一九九四年たった一〇人で「北九州がつこうユニオン・うい」という労働組合を立ち上げ、一〇年が経った。

個人の利益をどこまで優先できるのが、組織に問われるところである。労働者として、そしてもちろん一人の人間として、絶対に譲れない一線というものがあるとするば、私たちは「君が代」斉唱の際にただ黙

って座っただけで処分されたことに異議申立をしないことはできなかった。心（＝良心）を売り渡すわけにはいかなかったのだ。

どうしようもなく組織や多数に寄りかかる弱さがある。大きな組織があれば勝てるのだろうか。数は力であることも間違いではないし、一人では闘えない。しかし、見えない組織幻想にいつまでも頼ってはいけません、何も始まらない。大事なものは、一人一人がどう元気に闘うか、生きるかなのである。

冒頭、郵便局員の過労死を例に上げた。なぜ、死ぬまで働くのか。なぜ、その前に異議申立できないのか。怒りをぶつけることができないのか。不法行為を追及しようとするのか。「死」というところまで追い詰められるまで人は声を上げないのか。それは、一人一人が孤立させられ、傷みを共有する場を奪われ、身体的にも精神的にも異議を唱えるエネルギーを失わされ、その結果、見えない不安ばかりに怯え、目の前の人と語りながら他者の思いに心を馳せることができなくなっているからではないだろうか。

しかし、だれもそんな閉塞した社会を望まないだろう。そして、いくらお金があっても、自分だけが生き

延びても、それでよしとすることはなかなかできないのではないだろうか。

小さなノーマを発信し、身近な人に伝えながら、小さな勇気を寄せ集め、他者への最大限の想像力を忘れずに、前に一歩踏み出すだけだ。上からいくら叫んだところで、人の心は動かない。

■ココロ裁判を知るために……

●ホームページ

「素敵に不適格！」北九州がっこうユニオン・うい
<http://ww2.tiki.ne.jp/~ui-maki/index.html>
あんちひのきみ「一人じゃないよ」ココロ裁判アーカイブ
[http://www.l.jca.apc.org/anti-hinokimi/
archive/kokoro/index.html](http://www.l.jca.apc.org/anti-hinokimi/archive/kokoro/index.html)

●紹介されている本

- ・『日の丸・君が代の戦後史』岩波新書、田中伸尚著
- ・『させられる教育』岩波書店、野田正彰著
- ・『学校が「愛国心」を教えるとき』日本評論社、西原博史著
- ・『憲法を獲得する人々』岩波書店、田中伸尚著

●裁判を傍聴してくださる方

次回第三三回弁論（最終弁論）

一月二五日（火）午後三時半～四時半

福岡地方裁判所 三〇一号法廷

●連絡先 北九州がっこうユニオン・うい事務所

TEL/FAX093-533-9480

北九州市小倉北区鍛冶町 2-3-22-301

●カンパは左記の郵便振替口座までお願いします。

「ココロ裁判の会 01790-1-53845」

※ ※ ※

ココロ裁判の知恵をわけてもらおう

中村 泰子（フェミックス）

この夏、博多で開催されたWeフォーラムの分科会（北九州ココロ裁判の意味）で「北九州がっこうユニオン・うい」の竹森真紀さんのお話を聞いた。

お話の中で、状況は確かに深刻だったけれど（こうあるべき）とか（絶対に〜）というのではなく、例えば、「今度はどう出てくるかねえ」とみんな話しながら、「あんたは今度が戒告の三回目だから、今度は無理せんとき様子をみよう」とか「一回休みにしたほうがいいんじゃないかねえ：」などと会話しながら、ぼちぼちやってきたんですよというお話や、ふだんの学校（卒業・入学式は学校生活のほんのわずかの時間だから）の大変さなど、一九人の人たちの横顔が見えるようで、一人だとうどんどん追いつめられてしまうけど、状況を笑い飛ばしつつ真剣に、ゆるやかにつながりあってやってきたというお話がとても印象的だった。

さまざまなバッシングに押しつぶされず、有効に対抗

していくために——仲間と地域ユニオンをつくって支え合いながら闘うというやり方、弁護士を立てずに本人訴訟で裁判をして全員が意見陳述をしていくというやり方、その時々で考えながら自分たちのたまたかいつくりだしていくという、そのやり方にとっても興味を持った。

「なるほど地域ユニオン：思いついたきっかけは？どんな支え合いやメリットがあつたの？」「本人訴訟って何？弁護士なしでどうやって裁判できるの？（弁護士や裁判所という司法のシステムにとられないことのおもしろさ、大変さって何？）」「あ：時間が足りなくて十分に聞けなかったことも含めて、ココロ裁判の知恵をみんなにわけてもらいたくて、竹森さんに原稿をお願いした。

※ ※ ※

さてここで、ココロ裁判を理解するために若干の補足をしておきたい。

北九州の公立学校では一九八七年から卒業・入学式の「君が代」斉唱時に（ただ黙って座っていただけ）の教職員が処分を受け続けてきた。その処分に抗して一九名（当初は一七名）の人たちが原告となり福岡地方裁判所で処分の撤回を求めて係争中なのが、北九州ココロ裁判（学校現場に内心の自由を求め、「君が代」強制を憲法に問う裁判）の略称）である。九六年の提訴から八年、十月一二日には第三三回の弁論が行われ、来年一月二五日

にはいよいよ最終弁論(第三三回)を迎える。

ココロ裁判のなかで大きな争点となっているのが「四点指導」といわれるものである。「四点指導」とは、八五年八月の文部省(当時)の「国旗掲揚・国歌斉唱」の「徹底通知」を受け、北九州市教委が子どもと教職員に徹底させるために、各校長に通知したもので、

一、国旗掲揚の位置は、式場ステージ中央とし、児童・生徒等が国旗に正対するようにする。

二、式次第の中に「国歌斉唱」を入れ、その式次第に基づいて進行を行う。

三、「国歌斉唱」は、ピアノ伴奏で行い、児童・生徒及び教師の全員が起立して、正しく心を込めて歌う。教師のピアノ伴奏で行う。(傍点、中村)

四、教師は卒業式に原則として全員参列する。

これが憲法一九条の思想・良心の自由(「内心の自由」)に反し、子どもと教員の心を縛りつけることになる。

この「四点指導」は職務命令として実際に強制された。八〇年代半ばまではわずかながらも学校独自の卒業式があったが、「四点指導」が徹底されていったころ、ステージに飾られた菜の花や壁面に飾られた子どもたちの作品すら、校長の独断で撤去される事態もあったという。

しかし「歌えない・歌いたくない」子どもたちがいた。なぜ「日の丸・君が代」の実施・強制なのかの議論もな

いまま、命令と処分のみを振りかざされることに屈したくないと、原告ら教職員は、ただ(黙って座る)しかなかった。(黙って座る)ことで「ココロの自由」があることをメッセージとして伝えようとした。そのことが、職務命令違反として処分されることになった。この裁判を原告たちが「ココロ裁判」と呼ぶのは、そこに強い思いが込められているからだという。

一人ひとりがどのような思いをもってこの裁判の原告となり、裁判に訴えてきたのか……その詳細は「北九州がつこうユニオン・うい」のホームページ(前掲)に詳しい。またあんちひのきみ「一人じゃないよ」のホームページの「ココロ裁判アーカイブ」(前掲)で「ココロ裁判意見陳述集」とおくまで「いくんだっちゅうの」の一部と裁判の関係資料を読むことができる。意見陳述書というと無味乾燥なものと思いきや、これは全く違う。なぜ処分を受けてまで座るのか。北九州という地で育ち、学び、「学校」という場で働き、悩み、さまざまな出会いの中で考え、揺れつづける心と身体。原告一人ひとりの「ウタ・ハタ」(歌・旗)がとつとつと自らの言葉で語られる。その真摯な「言葉」に圧倒される。

NPO法人ウインクの
面接交流サポート事業

カインドリボン サービス

新川てるえ

(NPO法人Wink 理事長)

<http://www.NPO-wink.org/npo/jisyou/mk>

NPO法人ウインクでは七月から「カインドリボンサービス」をスタートさせました。子どもの気持ちを最優先に、離婚後の親子関係の修復を目的とし、面接日時の交渉を間に入って行ったり、面接時の立会いをカウンセラーがするサービスです（「優しさが会えない親子をつなぐ」という意味を込めてカインドリボンと名づけました）。

離婚後の関係が当事者間の争いになつたままの状態で、子どもの権利

や立場を冷静に考えられるでしょうか？ 養育費と面接交流は離婚家庭の子どもの権利です。それなのに、親の憎しみあいの感情に阻止されてスムーズにいかないことが多いのが現状です。

離婚時に話し合いがこじれた場合には、養育費も面接交渉権も審判で取り決められますが、心から子どものためを思って履行されているケースはとても少ないと思います。

また、面接交流が養育親側の精神的負担になっていたりすると、子どもは間に挟まって、本心を表現できずに苦しむことになります。

問題を解決するためにはサポートする機関や人が必要だと考え、将来的にサービス化できるのかどうかの検証を現在行っています。

面接交流後の養育親と別居親の心のケアが大切だと考えています。子どもの気持ちを最優先に、お父さんとお母さんの気持ちに平等に配慮しながら、親子の絆をつなぐサービス

をNPOとして確立していくことを目的にしています。

このサービスをスタートすると決めたとき、多方面からさまざまな声をいただきました。激励だったり反対だったり、会員からは不安の声もありました。

「養育費はないと子どもは育たないけど面接はなくても育つと思います。養育費を受け取っていたら子どもを必ず会わせないといけないのでしょうか？」

一方で、「貴団体は養育費の不払いへのとりくみをしています、養育費をきちんと払い続けているのに子どもに会えない父親が沢山いることを忘れないでください！」という、離婚後にわが子に会えないお父さんから寄せられるメールも多くありました。

私は、会えないのはお父さんではなく子どもたちである、と考えたときにこのサービスの必要性を感じて、スタートを決めたのですが、「会わせ

たくない」「会わせられない」お母さんたちの声もいくつか届きました。

会わせられないお母さん達の声、会わせない理由も様々です。DV離婚だったり、自分の気持ちはまだ不安定だったり、相手への恨みが強かったり、「頭では子どもの権利だとわかっていても、今は考えられないので、養育費と面接交流を両輪であると捉えないで欲しい」という声が多くありました。

離婚の理由や状況は人それぞれです。誰もが子どもの権利を最優先に考えてすぐにアクションを起こせるかといったら、そうではないと思います。私はできないからといって責めないし、ただ考えるきっかけを作っていければいいなと考えています。

四月から、民事執行法の改正により、養育費の未払いに対する給与からの差し押さえが、将来に渡って可能になりました。

法律の改正をきっかけに、養育費

を通して親としての責任を大人たちに考えて欲しいと、『自分でデキル養育費強制執行マニュアル』（ひつじ書房、二〇〇四年四月）という本を執筆しました。

この本を完成させるために、私はわが子の親子関係修復の問題に取り組みました。壁にぶつかってはあきらめそうになる自分をはげましながら、役所や裁判所に通い、知恵を借り、試行錯誤を経た結果、昨年の秋に勇気をもって養育費支払いの調停を行い、ようやく支払いが再開しました。

娘は今年一六歳になりました。生後四ヶ月で離婚して、決められた養育費の支払いが滞ったまま、一五年の歳月が流れていました。

「父親なんて血の繋がりでしかないから関係ない」と否定してきた娘に養育費支払いの事実を毎月伝えて半年後、娘の口から「一度会ってみようかな」という台詞ができました。そしてこの夏、娘はついに実の父親

との再会を果たしました。

帰ってきた娘が「会いに行っちゃった。今までの疑問が全部とけました。」「今までも何もしちゃれなくてごめんね。これからはできる限りのことをするから」と、お父さんが謝りながら愛情を伝えてくれたそうです。そして「ママに感謝している。居所を探してくれて養育費の調停をしてくれて、きっかけをつくってくれて嬉しく思っている」と話してくれたそうです。

そんな報告を聞いて、話しあいながら私も娘も泣いていました。自分が生まれてきたことを父親から歓迎されていないと思いつつ、さびしい思いをして育ってきた彼女の疑問がすべて解決して、とてもいい思い出の一日になったようです。

娘の父親は現在では再婚して四児の父親。親として、人間としての成長を強く感じた瞬間でした。

私は二度の離婚をしていて、息子

には別の父親がいます。娘と同時期に養育費取り決めの調停をしたのですが、三度の呼び出しに応じてくれずにしぶしぶと来てくれた四度目の調停で、月一万円の養育費の支払いを約束。しかし、調停調書に記載された約束は守られないまま、時が過ぎていきます。調停では断固として私との同席を拒否したことなどを考えると、息子の父親は七年たった今でも離婚の傷を深く引きずっているのだと思います。とても残念な気持ちですが、いつか彼が心から息子のためを思える日が来る日がきつとあると信じています。

我が家の問題は、まだまだ果てしなく続きます。

さて、スタートした「カインドリボンサービス」ですが、この夏、ひとつのケースを担当しました。

離婚から七年、養育費を支払い続けているお父さんと娘との面接交渉の交渉を、間に入って行いました。

残念ながら養育親側の恨みの感情が強く、手紙のお返事はなく、電話をしても無言で切られてしまう、話を聞いてもらえないすべもなく諦める結果に終わりました。

会えないお父さんの気持ちに電話やメールで聴いてカウンセリングしてきたので、実らない結果に大変無念な思いをしましたが、「心の中にあつた葛藤をこうして相談できただけで救われました。誰かに胸のうちを話すというのは大切なことですね。それだけでこのサービスの意味はあると思いますよ」と彼が最後に言ってくれたのがとても励みになりました。まだまだ頑張っていこうと思います。

息子の父親のこと、そして今回担当したケースのお母さんの気持ちを通して想像してみるのが、自分の中にある離婚というマイナスの気持ちを引きちんと克服できていない時期には、子どもの権利は頭でわかっていても

拒否してしまう気持ちがあるのではないのでしょうか。

離婚が間違った選択ではなかったと心から思えるようになった時、きっと子どものことを最優先に考えられるようになるのかもしれませんが。そして、その時には離婚した夫婦としてではなく、子どもの親同士としてわが子の幸せを考えて接することができるようにきつとなると信じています。

最終的には当事者間の気持ちの整理と時間による解決に任せるしかないのかもしれませんが、現状を諦めてほつたらかしくしておくのではなく、努力を続けることも必要なのではないでしょうか？

なんでこんなしんどいことに取り組んでいるんだろうと自分でも思うことがあります。努力しないで諦めてしまうのが嫌なので、自分の問題として逃げないで頑張っていきたいと思っています。わが子のためになると信じて…。

江口凡太郎

(育児休業で主文・学生)

「ただいまー」と我が家に入ってくるK君は、地元の大学に通う教えます。週に一、二回晩ご飯を食べに来てくれます。妻曰く「よかつたねー相手にしてくれる人がいて」。まさにその通りです。主父生活は、予想していたとはいえ、やや閉じこもり気味、「ご飯」で若者を釣っているわけですが、買い物、留守番、子どもの勉強や遊び相手など、大活躍のK君です。何より私の話し相手なのです。

K君は実は双子で、仲のいい相方

は札幌に進学し、自宅には彼一人となりました。高校を卒業するまでずっと一緒、しかも小さな町のためケラスも同じ、部活まで同じという生活をしてきたのです。

三年間二人を担任し、外見だけでなく行動様式や思考パターン、趣味、特技やジョークまでそっくりで驚きました。好きな子も一緒なのでしょう。さらに私服も色違いで同じ物を着ています。高校生でもお揃いなのです。識別が困難になるのでやめてくれと言うと、衣類の管理上合理的なのだということでした。

そしてこの二人、好奇心が旺盛でとても物知りです。特に、自然が好きで、いわゆる雑学の宝庫です。

K「せんせー小柴博士がどうしてノーベル賞とったか知ってる？」

凡「知らないよ、そんなこと」

K「えーそれでも教師かー、ニュー

トリノがね俺たちの体の中も突き

抜けて……」

凡「???そんな難しいこと知ってるなら、もっと学校の勉強をしろー」

K「じゃ、これテストに出してよー」という感じ。ノーベル賞級の?彼らは「秀才」タイプではありません。それどころか、父親の名前が漢字で書けませんでした。でもすごくいろいろなことを知っている。ちょっと不思議で人間的魅力にあふれる彼らがこれからどんな成長をとげるのかとても楽しみです。そんな、双子の一人が卒業後も、「ただいまー」と来てくれるのですから、私も幸せです。

ところが、来年から彼も札幌に行くことになりました。大学がキャンパスを移転するのです。多くの若者が流出し、過疎化は一層すすむこと間違いありません。我が家も、本当に寂しくなります。

『覚醒』と『自恋』のための「ジェンダー論」

女子大での教育経験から

第13回 セクシユアリティの不平等

沼崎 一郎 (東北大学教員)

ジェンダーの続きはセクシユアリティである。セクシユアリティという単語は、まだまだ馴染みが薄い。性自認と性指向の組み合わせ、などと言っても、ますます分からなくなるだけだ。

しかし、上戸彩がブレイクした数年前の金八先生のおかげで、「性同一性障害」の存在は広く知られるようになったし、自称「半分少女」のKABA、ちゃんや、「花を愛した男」假屋崎省吾など、テレビでお馴染みの「おねえキャラ」の認知度も上が

っている。言葉は知らなくても、具体的なイメージを通して、セクシユアリティの多様性と可変性の認識は、少しずつ広がっている。

授業では、そうしたポピュラーイメージを使いながら、トランスジェンダー(TG)やトランスセクシユアル(TS)、同性愛や異性愛について一通りの解説をすることになっている。さらに、一回の授業だけではとても足りないの、伏見憲明さんの『(性)のミステリー』(講談社現代新書)を読書課題として与え、感想文

を書かせることにしている。

最近気づいたのだが、ヘテロセクシズム(強制的異性愛)は、少なくとも私が接している女子学生の間では、まだまだ強い。それは、「えー、あんな男に興味ないのぉー。そんなの絶対変!」といった会話に表れる。それで、異性愛(ヘテロセクシユアル)と同性愛(ホモセクシユアル)の話をする際には、両性愛(バイセクシユアル)と無性愛(アセクシユアル)の話も加えることにしている。「自分と違う性に惹かれる人もいれば、自分と同じ性に惹かれる人もいれば、どっちにも惹かれる人もいれば、どっちにも興味のない人だっている」という話をするのである。性的欲望があるかないか、あるとして、それはどれほど強いのか弱いのか、どの方向に向くのかは、それぞれ様々なのだと強調するのである。そして、「だから、男に興味がないという人も、全然異常ではありません。男に惹かれなければ女に惹かれると

決まっているわけではないし、性欲がなくなったって全然OKなんだからね」と念を押すことにしている。

そうすると、「先生の話聞いて安心した」とか、「無理して恋愛しなくてもいいのだと分かってホッとした」といった感想を書く学生が結構いる。「カレシが欲しいと思わなくなつて、いいんだよ」という一言が、ヘテロセクシズムのプレッシャーを軽くする手助けになるらしいのだ。やれやれである。

ヘテロセクシズムのもう一つの弊害は、同性愛関係をも異性愛のモデルで見してしまうという点にある。つまり、同性愛カップルでも、どちらか一方が「男役」で他方が「女役」に違いないと思ってしまうのである。そういうカップルがいないわけではないが、そうとは限らないし、むしろ固定的な役割分業のないカップルのほうが多く、異性愛カップルに比べて対等な関係を築くことができるという人たちもいるということとを、

必ず話すようにしている。もちろん、ヘテロな男性である私が、同性愛者の「代弁」をすることなどできないし、してはならないわけだが、ヘテロな主流派の偏見を放置しておくこともできない。この辺は、マスプロ授業では扱いが非常に難しい。

「ムズイ」話ばかりでは学生は厭きてしまうので、一通りの言葉の説明を終えたら、電気を消して絵を見せる。「普通」の男性セクシュアリティと女性セクシュアリティが、どのように不平等に作られているかに気づいてもらおうのが狙いだ。

使うのは、男性誌と女性誌の表紙である。男性誌といっても、ポストや現代ではなく、ヤングマガジンやヤングジャンプなどのコミックとか、パソコンやインターネット関係の雑誌である。水着女性が写っている表紙も使うが、そうではない女性の写っている表紙も使う。女性誌のほうは、学生たちが読んでいそうなもの

を選ぶ。大学生協に平積みされているファッション雑誌なども、女性の写っている表紙を使う。交互にいくつか見せた後で、ちょっと電気を付け、学生に聞く。「違うでしょう?」どこが違うか分かる?」

学生たちはポカンとしている。首をかしげる学生もいる。みんな不思議そうに私を見ているだけである。

「もう一度じっくり見比べてください」と言いながら、再び電気を消し、水着女性の表紙を映す。「はい、この女性は、上を見えますか、下を見えますか?」と聞く。「上」という答えが返ってくる。「じゃあ、こっちは?」と言いながら、ファッション誌の女性モデルの表紙を映す。「この女の人は、上を見えますか、下を見えますか?」と聞く。すつくと立って、正面を見つめているのだが、あごを引いているので、どちらかと言えば「下」向きである。

「上見てるか、下見てるか、考えながら見てね」と言いながら、男性

誌の表紙を映していく。水着であるうがなかるうが、表紙の女性は上目遣いで見上げるようなポーズを取っている。「皆、上目遣いだよねえ。」ということは、男性読者は、この表紙の女性をどう見てることになる?」「上から、見下ろしていることにならない?」「しかも、見下ろすと、胸の谷間がクッキリ見えるよねえ。」「男たちは、こうして、女を見下ろす見方を学ぶんだよ。ヤンマガとかヤンジャン読み始める頃からね。」「いいかい、君たちがニッコリ笑って上目遣いをするときは、男に対して、自分を下に置いていることになるんだよ。自分を見下ろしてくださいと言っているのと同じなんだよ。」「じゃあ、君たちが読んでるファッション誌はどう? 表紙の女性モデルは、君たち読者を見下ろしてないかい?」「君たちがファッションリーダーと崇める歌手や女優だからね。当然、君たちのほうから見上げる存在だよ。」「浜崎あゆみを、見下ろ

すような角度で写した写真、見たことある?」

「要するに、偉い人、上の人、カッコイイ人を写す時には、下から見上げるように写すんだよ。反対に、見ているほうが偉いときには、見下ろすように写すんだね。」「この水着の井上和香は、やっぱり上から見下ろされてるよね。唇と胸だけ、やたら強調されて。」

「それでは、男はどう写されてるだろうか?」と言いながら、男性誌と女性誌の中の男性の写真を、何枚か映してみせる。どれも、正面を見据えているか、上から見下ろすようなポーズの写真ばかりである。最近の女性誌は、男性ヌード(と言っても大したものではないが)を掲載することもあるので、そんな写真も数枚見せることにしている。そのように、男性を性の対象として描いている写真でさえ、女が上から見下ろすような視線で撮られたものは滅多にない。「ね、見下ろされるように撮ら

れている男はいないでしょう?」

「おお」というざわめきが教室に広がる。

「それに比べて、女性のほうは、上から見下ろすように撮られているだけでなく、女性の身体のパーツだけが強調される写真も多いんだよ。」と言いながら、女性の胸や足、ヒップなどがアップになった男性誌の写真をいくつか映す。ヌードではない。水着姿や着衣のものだ。それでも、十分メツセージは伝わる。いや、そのほうが、普段の男性の視線とはどういうものかが明らかになる。「だけど、ほら、さっき見せたように、男性はヌードでも必ず顔が写ってるよ。身体はどこかだけアップにされるってことはないんだね。」

ざわめいていた教室を、今度は重苦しい沈黙が包む。

「こうして、週刊誌の表紙や、写真を見比べるだけで、男と女が決して性的に対等ではないことが分かりますね。」電気を付け、黒板に「見る

性／見られる性」と大きく書く。「現代の日本では、男性⇨見る性であり、女性⇨見られる性に作られているんだよ。」

「たとえば、ドラえもんのお風呂に入っていると、のび太が覗いてイヒヒイって笑うことがよくあるよね。でも、反対に、のび太のパンツが脱げちゃったりしたとき、しずかちゃんは覗いて笑うかい？ そうじゃなくて、イヤーンと言った顔隠して見ないようにするよね。こういう子ども番組でさえ、男の子は（見る性）に、女の子は（見られる性）に描かれているわけ。そういうアニメを見て育ち、ヤンマガとかヤンジャンでますますそういう視線を学習して、男たちは自分も（見る性）に、女の子はいつのまにか（見られる性）に育っちゃうんだね。その結果、君たちは男にどう見られるかばかり気にして化粧に励むんでしょ？」

「確かに、最近では男の子も化粧す

るけど、それは見られるためではなく、見せるため。」「その証拠と言っただけで、露出狂って男だよ。おはさんがレインコートを買って開いて露出するなんて話も聞いたことないよね。それから、覗き魔って、男だよ。覗きで女が捕まったなんて話聞かないでしょ。男は見たり見せたりだけど、女はいつも見られるばかりじゃない？」

「これだけ見ても、男と女のセクシュアリティは、対等じゃないよね。」
学生たちの感想は、おしなべて「こんなふうに見られているとは知らなかった」というものだ。「コンビニでバイトしてますが、週刊誌の表紙にこんな違いがあるなんて、全然気づきませんでした。今度よく観察してみます。」と書く学生もいる。「そのほうがカワイイかと思って、友だちと上目遣いの練習をしていた私は何だったんだあ」なんて感想もある。「上目遣いの女は、私も嫌いだ」という感想もある。

男性誌の表紙や写真は、学生たちにも、女性のセクシュアリティというものを相対化し、客観視するきっかけを与えてくれる。女性を性的対象にするとはどういうことなのか、具体的に掴むことができるのだ。

最後に、大学の各所においてある就職情報誌やポスターの女性像を見せることにしている。どれも、遠くを見つめる女性を、下から見上げるように写したものが多かった。あるいは、自信溢れる表情の女性が、しっかりと正面を見つめている。「ほら、全然違うでしょ。働く女、自立した女の描かれ方は！」

そして、黒板に大きく書く。「男の目線はドウデモイイ。男好みではなく、自分好みの女になるう！」

*ご質問・ご批判を歓迎します。
numazaki@sal.hokku.ac.jpまで電子メールでお寄せください。

「ひまわり」の日々

入江一恵



「ひまわり」TEL078-783-7784
アクセス：JR朝霧駅下車、バスで3つ目
「明舞センター前」下車

【第八回】 一通の手紙

「ふれあいお食事処」と称しながら、ひまわりは椅子が十七席しかない。実は最近、十二時から十二時半頃にお客様が集中し、ふれあいどころではない状態になる。一時になると完売する、という噂が広がっているのかも知れない。そんななかで、少し時間をずらしてゆつくりされるお客様もいる。Fさんもそのお一人、時々お友達と来られて、食後のコーヒーまで味わいながら楽しそうにお話されている。そのFさんから、先日、CD二枚を添えて一通の手紙をいただいた。

「食べてほつとするような、幸せになるような食事をいただき、美味しいコーヒーを飲む至福のとき、心癒される思いをひまわりでいただいています。この間、テレビでモーツァルトの音楽が流れていました。この音楽を植

物に聴かせると、成長が何倍も早く、大きくなるということ。また、人が聴くと健康に良いということ。モーツァルトの音楽は宇宙の音楽を取り入れているとか。大阪市立大学が開発した「宇宙音楽」のことが新聞に記載されていました。このCDをさしあげます。宇宙の波動で何か神秘的な気分になり、爽快になります。先生はご自分のお体を酷使されています。先生のお体のことが心配で、つい出過ぎたことをしてしまいました。ほんの少しの時間でもいたわってください。そんなことにお役に立てば——と、思って」

Fさんは八十歳でお一人暮らし。いまもいくつかのサークルに入っておられ、友人と学びあう楽しみを知っておられる。二人の娘さんは東京と山口に在住。或る時、「老後に不安はないですか」の私の質問に「不安は全くありません」の返事に、質問を続けることができなくなりました。きつと自律的な暮らしをしておられるのだろう。

それにひきかえ私は何なんだろうと思う。確かに週四日は朝早くから十二時間余ひまわりに拘束され、ハラハラ、ドキドキ、イライラの三重奏でかなりストレスはたまる。でも家では時間があると、泥のように寝るといった暮らし。健康管理を人前では話しながら自己のそれは全く無為無策。さすがに私もFさんの手紙にはまいった。

CDから流れる音楽は聞こえてくるというものではない

かった。せせらぎの音、かすかな虫の鳴き声、遠くの風の音、そして風鈴の音色にいたるまで、それは確かに聴くという私側の心の準備がなければ体になんの響きもないものであった。それはいままでの私の暮らしにはなかった「無」の境地をつくっていた。

一周年の記念特別献立と特製昆布の佃煮のおみやげは好評であった。配達されたお弁当に涙をうるませたMさん、「二〇%よ」と喜んだEさんと、様々な反響があった。二年目は順調に滑り出した。「ひまわり」を必要としている利用者の方が私たちの支えになっている。NPOひまわり会は法人格はとっていないけれど四十一名の会員を持つ。利用者は会員制をとっていないために正確な数は把握できないが、殆ど固定されてきた。そこに口コミで新たなお客様がおいでになる。厨房の規模からいっても満杯というところだろうか。これからは数の問題ではなく、私たちが最初に掲げた「食をとおした福祉コミュニティづくり」をいかに定着させていくかである。さらにコミュニティビジネスとしての経営基盤もおろそかにできない。来年の三月で県の助成対象としての期間は終わる。でも仕事はこれからというもの、厳しい試練が待ち構えている。目下、民間の財団への助成申請を検討中である。一年五ヶ月の間に鍛えた足腰はこの試練に耐えられるであろうか。

昨年十一月、木枯らしの舞うなかで、私たちは食事提供の目標として「忘れられた旬の味、季節を取り戻す。昔懐かしい家庭の味、そして栄養バランスを考えた安心できる食事」というフレーズを考え、日々実践してきた。このことは、予想以上の反響を呼び、地域の人々、特にお年寄りの気持ちに浸透し、一体化した。食文化の継承というものは、本来家庭を通して行われるものであろう。しかし、現在のようにその家庭の機能が壊れた時代にどこでその代替ができるのだろうか。いま七十、八十代の方々は、かつて家族の食事を作り健康を支えた。いまひとりになって「自分ひとりのために作ることが面倒になった」と一様におっしゃる。地域のなかの小さな単位で、この方々のニーズを汲み上げた「ふれあいお食事処」が必要なではなからうか。そこでは、生産者とながるパイプがあり、安心できる食材が提供され、めずらしい食材ではそれを使った料理のレシピも話し合う。昨秋には「むかご飯」「むかごのてんぷら」、冬には「ふろふき大根」のゴマ味噌の作り方に質問が集中した。春には山菜のあくの抜き方、そして再び巡ってきた秋には、「さつまいものつる」「きくいもの根」という〈救荒食〉まで飛び出した。店内の壁の写真は「錦秋の紅葉」、見事にゆく秋を演じている。

(文・いりえ・かずえ/イラスト・かとうゆみこ)

木村栄

連載「女が歳をとるといふこと」 88

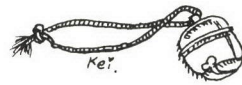
冬至

去年あたりからである。

今がどん底、明日からどんどん日が長くなる。そう思ったら、小躍りしたくなるような喜びを感じた。小躍りが言い過ぎなら、ふつふつと湧いてくる期待感と言ってもいい。つまり、希望。裏切られることのない、絶対の希望だ。明日から日が長くなるという、それだけのことがこんなに嬉しいなんて、年をとってみなければわからないことだった。

木々の葉もあらかた落ちて、これから本格的な寒さを迎えるという時期に光の春を予告するのは、何とも心憎い暦の演出ではある。

とは言え、毎年冬至を迎える度に、一つ年をとっている。又一年、命の時間が短くなる。



これは希望と言えるだろうか。

一日遅れの柚子湯に浸かりながら、考えた。

年々歳々、生身の体は老いる一方だが、歳々々々、自然の営みは同じ姿で巡ってくる。裸木の先には芽吹きが春が、爛漫の花が散れば新緑が、緑濃い夏木立の後には豊かな実りと紅葉がと、一足先の小さな期待に釣られて、まるでそれ自体が希望であるかのように年をとることができる。そして一年の終わりに、冬至がまともに翌年分の希望をくれる。自然の巡りが、老いへの落下をゆるやかな螺旋状に和らげてくれるのだ。

それだけではない。年をとると、上り坂の頃は何とも思わなかったことが苦になる。例えば、体調を崩すとやたらに気が滅入る。老いと病気が互いの進行を加速し合って、このまま病み衰えていくのではないかと、毎度思い煩う。

その悪循環が「冬至」のおかげで断ち切れた。具合が悪いのは「今悪い」という、それだけのこと。今悪くても又元気になる。どん底まで行けば後はよくなるだけ。そう思えるようになった。巡る季節が生老病死の苦しみを和らげる緩衝剤の役割を果たしてくれているのだ。

さて、翌早朝、五時。

いつもの時間に起きて勇んで窓を開けたら、なんと、昨日と同じ真つ暗闇の西の空に皓々と満月が輝いている。春遠からじとは言え、見えない希望をもち続けるのは難しい。

わがまま映評 18 『ライフアーズ』 満田康子

坂上香。この名前を知ったのは、『死刑事件弁護士』（大谷恭子著）の出版パーティーの席上だったと思う。死刑の問題に関心を持つジャーナリストであり、私が『死刑廃止論』（団藤重光著）の編集を担当したときに資料収集などに熱心に協力してくれたアムネスティの岩井信さん（現在、弁護士）のパートナーであると知って親近感を持った。その後、彼女の製作したTVDキュメント「ジャーニー・オブ・ホープ——死刑囚の家族と遺族の2週間」をみたり、著作『癒しと和解への旅——犯罪被害者と死刑囚の家族たち』を読む中で、犯罪の被害者と加害者を二項対立で考えない柔軟な思考、取材対象に寄り添い追求していく優しさとたくましいチャレンジ精神に感心した。その坂上さんがプロデューズ・監督した初の劇場上映ドキュメントが完成した。これは何をおいても馳せ参じなければ。

「ライフアーズ——終身刑を超えて」がその映画である。「ライフアーズ」とは、終身刑・無期刑受刑者を意味する。アメリカの三〇〇万人の受刑者中一三万人余がライフアーズだという。坂上さんは、カリフォルニア州のサンディエゴ郊外にあるR・J・ドノバン刑務所内で、民間団体アミティが運営

する更生プログラムに参加するライファーズに密着取材する。

アミティは、「治療共同体」という心理療法的アプローチによって、犯罪者や薬物依存者等の社会復帰をサポートするNPOである。服役経験者や薬物問題を抱えている人々が専門的なトレーニングを受け、カウンセラーの資格を獲得、インターンを務めてスタッフとなる。刑務所内のプログラムでは服役中の受刑者がインターンとなり、自分の辛かった経験を語ることによって参加者たちの抑圧されている感情や声を引き出す役割をする。カメラはそのワークシヨップのありさまを捉える。一〇人ほどが円陣を組み、議論をしたり、手を握り語り合うのだが、彼らの思索的な表情にまず驚く。

そして彼らのほとんどが幼児時代にDVを経験したり、性的虐待を受けており、その苦しさを忘れるためにアルコールや薬物に依存、ギャンググループに引き込まれ、大きな犯罪を起こすという共通のパターンにも驚かされる。

映画はライファーズの一人レイエスに光を当てる。五一歳。第一級殺人罪のため三〇年を刑務所に暮らす。彼はアミティとの出会いによって、はじめて罪を認識し、罪を償うことを考え、アミティで活動しながら生きていく希望を持つ。彼の仮釈放審議会の様子も写し出される。ここまでカメラが入れることにも驚く。さらに日本に比べて刑務所内の個人の自由度が大きいことにもびっくりする。

九歳から薬物を使用、一〇年の服役経験を持つジミーは釈放後、刑務所内でアミティの活動に従事。彼が受刑者たちに贈ったクリスマスプレゼントは、単に食べ物ではなくて、人間としての「尊厳」である。円形の牢獄に閉じこめられた人々への「今日は君の日だよ」というジミーの呼びかけに、獄内から答える人々の声、声。

一〇年以上前からアミティの活動に深い関心を寄せていた坂上さんが、映画を撮ろうと決意したとき、彼女は妊娠中であり、夫は闘病中だった。彼女は生後四カ月の子どもと母親と一緒に、撮影のため渡米した。渡米は数回に及んだ。難しいテーマに執念深く取り組む彼女のバイタリテイに拍手。

(坂上香監督／二〇〇四年／日本)

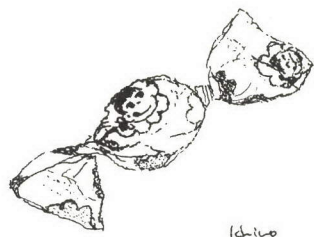
近頃、身の回りにある電化製品が壊れだした。壊れ始めると、次々と壊れていくのはなぜなんだろう。夜中にミーティングでもしてるんだらうか？ 自宅の卓上電話が壊れたので、六年生になった長男、健太君と一緒に、近くの量販店に電話を買いにいった。車の中で、「自宅の電話が壊れたけど、事務所の機械も替えなきゃいけないだよね」と話しかけると「そうなんだ。またお金かかるね。なにが壊れそうなの？」と関心を持ってくれたので「やっぱりMacかな？ でも替えるとしたら、事務所にある四台のMacと、それにプリンターも新しくしなくちゃいけないでしょ。全部代えたら高額だよ」とため息まじりにつぶやくと、「それと、OSも変わっているから、ソフトも新しくしなくちゃいけないんだよ」と突っ

過去を振り返らない／先を考えない【47】

「お父さん、信用はね……」

松本一郎

まつもといちろう／キミ子方式：講師
◎ご感想・ご意見おまちしています。
ichiro-m@ka2.so-net.ne.jp



込んで来た。「そうそう、ソフトもってなったら結構いい金額になっちゃうよ。事務所で一番使うのが、顧客管理のソフトかな。今日まで六〇〇〇件くらいの顧客名簿になってるよ。それだつてけっこう高いんだよ」と、ブツブツと言っている、突然、彼が言った。「まあ、新しいMacもいいけど、お父さんの会社、セキュリティにもう少し気をつけたほうがイイよ。だって、お父さん、鍵かけないでしょ」。痛いところを突っ込まれてドキリとした。自分がだらしないだけなんだけど、仕事をたくさん抱えて、時間のないときに限って、事務所の鍵を忘れて、中に入れずに途方に暮れた事が何回あったか。そういう急いでいる時に限って忘れるというクセがある。家でも、鍵がなくて、玄関の脇に腰かけて、家族の帰りを待つとい

う経験は数えきれないくらいあるので、基本的に、人を信用することにしてはいる。事務所のある街はきつと正直で誠実な人しか住んでいないと自分に言い聞かせ、泥棒に入られるのは人を信用してはいからだと、さらに自分に言い聞かせ、ボクは自分以外の全ての人を信用しているので泥棒に入られるはずがない、と鍵をかけていない。

彼に、なぜ鍵をかけないのかを説明し、人を信じていれば災難は降りかからないのだと詭弁を力説している、その詭弁を見透かしたように言葉を遮り、彼は言った。「言っていることはわからなくもないけど、もし泥棒が入ってさ、お金や物はいいよ。それはしようがないと思うけど、もし生徒さんたちの名簿を盗まれて悪用されるようなことがあったら、信用問題に

なっちゃうよ。信用はね、積み上げるのは大変だけど、失うのは一瞬なんだよ。気をつけた方がいいよ」。

そう彼に説教されて、「まったくもって正論で、その通りでございます」と答えると、あたり前のことと言っただけだよ、って感じの前を見ている。前から、ボクよりもすっかりしていると思っていたが、なんか大人になっちゃったなと思いつつ、「データが流出して会社の信用を失うってよくあるよね。でも、ウチみたいに、一人一人との付き合い方がしっかりしていれば、信用ってそんなに簡単に失われないんじゃないかな？」と言うと、聞いているのかわからないのか、車の窓から流れる街並みに目を向けていた。

ボクが時間をかけて自分に言い聞かせた（信用すれば大丈夫）と

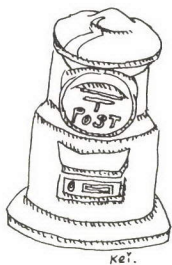
いう妄想も捨てるのも惜しい気がして、なかなか鍵をかけるという行為につながる。結局、鍵をかけるという習慣が子どもの頃からなくて、もし、留守の教室で夜だけ住んで生活してる人がいたら、それはそれでなんかたのしそうだし……と楽天的な性格が災いして、あたり前の事ができないままだ。

そう思っと思いついてみれば、手を洗った後にカーテンで拭くクセは卒業したし、歯磨きの習慣もこの頃やつとできてきた。そうやって、だんだん（あたり前）の事ができるようになってきたのだから、鍵をかけるという習慣も、もう少し大人になったらできるようになるのかもしれない。その部分では、すでに長男より遅れをとっているけど、それでも自分のいいところも知っているから、時の流れに身を委ねようと思っっている。

「言ってみるものだと思う」

三浦純子

みうら・じゅんこ/会社員



東京都に続いて、私の住む神奈川県でも、教育委員会がジェンダー・フリーを使わないという通達を出したという新聞報道があった。

知り合いの大学人たちが直ぐに行動を起こした。県教委は大学教育とは直接関係しないけれど、だからこそ、大学人が自分たちのスタンスで何か発言していくことで、危惧される事態への歯止めとして一定寄与できるのではないか、そして多くの分野の研究者が名を連ねることで、関心を持つ市民に対しても説得力あるものとしたい、という抗議への賛同を呼びかける文章に、私は感動した。そこで、私にも何かできないかと思つて、県教委にメールを送つてみることにした。「私が区役所でジェンダー・フリーを習つた事で人生が変わり、小学校でのジェンダー・フリーの動きをとて嬉しく思っていること。それなのに禁止にするって、なんで？」といった内容で。

以前の私は、私が言つて何になるの？という気持ちと、人様に意見を言うのを嫌われると思つていたので、おかしいと思つても実名で抗議することは避けていた。が、最近の私は人様に嫌われてでも自分の言いたい事は言うように変わつて来た。人はソレを「おばさん化」だと言つて、何でもいい、自分が心地よい方を選択するのみだ。後悔もしたくない。

すぐにメールで返事が来た。が、その内容がトンチンカンで……。まず、神奈川県では教職員向けの男女平等教育指導資料『男女平等教育推進のために男女共同参画社会をめざして』（県教育委員会、平成一四年三月発行）の中で、「ジェンダー・フリーとは、ジェンダーに基づく意識を克服し、男女を対等なパートナーと考えることです。したがって、性別によって差別されたり、固定的な役割を強制されたりすることなく、人間らしく、自分らしく生きる

ことができる社会、すなわち、男女共同参画社会を実現することです。」という定義をして使用してきた(↑ Good!)。しかし、「その後、二

年半が経過し、全国的にジェンダー・フリーという用語をとりまく状況はかなり変化をしております。また、一部に『男性と女性の違いを画的に一切排除しよう』という意味でジェンダー・フリーという用語を使用し、ご指摘のような『トイレを一緒にする』『更衣室を一緒にする』といったことをジェンダー・フリー教育と誤解するなどの問題が発生しており、(↑まじ?) 本指導資料で使用している意味とは異なるため、ジェンダー・フリーという言葉を使用する際には、その都度その言葉の意味を説明してから使用する必要が生じています。そういった状況にある言葉は、使用することによって児童・生徒に混乱を招く可能性があることから、あえて使用しない方がよ

いという判断で、今後、作成する予定の新しい指導資料では、ジェンダー・フリーという用語を使用しないことにしました」だつて。

せっかく良い解釈をもつて教師に広めて来た事を、誤解があるからと何で使用禁止にしてしまうの? 誤解を解くのが仕事じゃろ。と思つて、もう一度メールしてみた。

また返事が来た。「社会的・文化的につくられた性に基づく不必要な区別を見直すことは大切ですが、生物学的な性差に基づいて男女を分けることが必要な場合があることについて記述しております。その例として、更衣室や宿泊学習での部屋割りなどにおいては、男女を別室にするなど、適切に配慮することが大切であり、男女の違いを一切認めないといったような行き過ぎがないよう留意することなどを各学校や市町村教育委員会などの関係機関に指導したところでです」って、私はそんな事を

指導して欲しいんじゃないのに〜!

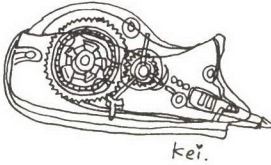
私はまた一つお勉強した気がしませんだ〜という事(返事が来て嬉しかった)。言わないでおくと、それは認めたくて事になってしまふという事。そういえば、私が以前行政でアルバイトをしていた時にも、一般市民からクレームが入ると蜂の巣をつついたような騒ぎになっていった。特に(横浜市の場合)「市長への手紙」がやばかった。上から下に、「お前ら何やつてんだー。市民の方が怒ってんじゃないかあ! どうにかしろ!」といったところだ。そうだ、皆さん騒ぎましよう。

よーし。暴れん坊になった私は、もう一度メールを出してみよう。

ジェンダー・フリーを推進するためにトイレや更衣室を男女一緒にした学校が実際にあるのでしょうか? 等々、事細かに具体的に聞いてみようつと。

あなたも「みんなで楽しく政治しよう！」(上)

～「おや？」から解決プロジェクトチームへ～



鈴木めぐみ

(浜松市市議会議員)

◆ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
megu@megumi-happy.net

■「おや？」と思うことが政治のはじまり

「おや？」「困った！」「何か変じゃない？」「こうなったらいいのに！」という素朴な疑問やつぶやきから「みんなで楽しく政治」が始まる。これまで、私が紹介してきた浜松での事例も、ひとりの素朴な疑問やつぶやきから始まっている。

「おや？」と思うコトには、具体的な「課題」が存在している。例えば、文化財の松が倒れた、子どもの通学路が危険だ、車椅子で自由に外出できないなどだ。一人でも困っている市民がいれば、それは「解決すべき課題」であり、市役所に担当する課があるか、施策や予算があるかなどは問題ではない。困っている人が抱えている「解決すべき課題」を、必要な機関や関係者などの力を借り、解決策を探っていくこうとすると、ここから「みんなで楽しく政治」が

スタートする。解決する担い手は、困っている本人も含むこの課題に関わる「みんな」であって、行政だけではないことを忘れてはならない。

■「おや？」を仲間や専門家に話してみ

「おや？」と思ったら、一人で解決しようとしなくて、まずは相談できる仲間、課題に関心を持ってくれるような専門家や関係者を探し出し、その力を借りることが重要なポイントだ。弁護士などの専門家、企業経営者、ジャーナリスト、研究者、行政職員、議員などは有力なサポーター候補だ。

講演会や本などで、「これだ！」と思う人がいたら、まず個人的に直接メールや手紙を書き、相談する。著名な先生であっても、こちらの熱意を感じてくださり応援していただけることは、これまでの私の経験上

実証済みだ。また、優秀な行政職員は、自分のまちの情報だけでなく、国や県の最新動向やデータ、市内外のネットワークを持っている知恵袋だ。直接の担当では、上司の許可なく公然と協力することはできないかもしれないが、該当課外であれば、協力は期待できる。

議員は、市全般に関わる情報や国、県などの情報、民間情報など、より多くの情報を持っていると同時に決定権限を有している。「こんなことに困っているけど、情報はありますか?」「どのようしたら解決できると思いますか」と党派にこだわらず、できるだけ多くの議員とコンタクトし、問題提起を試みる。ちなみに私がサポーターで関わっている事例でも、他の議員にも声をかけるようにアドバイスしている。多数決の世界である議会は、より多くの議員の賛同が必要だからだ。市民から

アプローチされれば、断る議員はほとんどいないはずだ。

■プロジェクトチームづくりへ

様々な専門家と話をすることで、課題とその解決方向が明確にされる。そこで初めて解決のためのプロジェクトチームづくりに取りかかる。困っている当事者が主体であることは当然だが、当事者だけで解決するには、問題が複雑で困難であることが多い。そのため、当事者を応援し、かつ信頼関係が結べる専門家や関係者もメンバーに加える。プロジェクトチームは、連絡会議ではなく、あくまでも実質的に課題解決に当たる集団で、解決に向けての議論と具体的な行動が実施されていく。実際の行動を通じて、それぞれの力を引き出し、信頼関係を深め、徐々に適切な役割分担を図る。必要な役割だが、現メンバーに当てはまる者

がない場合は、他から探し出し、メンバーに加えていく。

■プロジェクトチームの知恵と力で

課題解決のための小さな企画を仕掛け、いくつか実験的に行うと同時に課題解決のための仕組みづくりについての議論も重ねる。これらの中から生まれる小さな成功体験も積み重ねられ、チームの力となる。しかし、いくら良いメンバーとの議論と行動の結果、素晴らしい提案ができたとしても、その提案を多くの人に受け入れてもらい、理解を得、課題解決に向かうには、やはりオーソライズ(権威づけ)も必要となる。そこである程度方向が固まった段階で、どうオーソライズしていくかも戦略として考えていくことが大事だ。

仕事場の周辺から⑧

いつどこで起こるか分からない自然災害からのサバイバル

石渡 秋



今年、自然の力をいやというほど思い知らされた年だ。台風が10個も日本列島に上陸し、特に10月の22号、23号は各地で大被害をもたらした。その後、新潟県中越地震が起きた。95年の阪神大震災に匹敵する規模。何と言ってもあの新幹線が脱線し、幹線道路がズタズタに寸断され、がけ崩れなどで倒壊した家など、信じられない映像を連日テレビで見ても、体が震えた。余震が続く中、恐怖との闘いに疲れて、避難後に亡くなった方もいて何とも傷ましい。寒くなってきた避難生活は大変なものだと思いが、救援活動が続けられているので、希望をもってがんばっていたきたい。

実は、横浜市戸塚区にあるわが家も、台風22号で床上十センチほど浸水してしまった。床下収納から水が侵入し上のテーブルが浮き上がったときは、目を疑った。まずは2階へ避難。比較的速く水が引いたので大事には至らなかった。23号の時は床上までは上がらずかろうじてセーフ。22号の後片づけがようやくすんだところだったので肝を冷やした。

もともと道路より低い場所。周辺は、山を切り開いて住宅地として造成したためか、大雨が降ると、すべての雨水がわが家の庭に集まって、すぐ前にある小さな川に収まらず逆流して下水のマンホール

のふたを押し上げてしまう。停めておいたバイクをダメにして泣いたこともある。しかし、床上浸水を体験したのは初めてのこと。各地の被災地の光景は、わが家とは比較にならないほど悲惨で気の毒だが、少なくとも水が侵入してくる恐さは知ってしまったのである。

これまでは脳天気な地震対策・水害対策を何もしてこなかったが、この機会に心の準備と防災グッズの確保をしようと考えている。実際、キャンプ用品がけっこう役に立つことがわかった。サバイバル・キャンプの経験も積んでおくといいかもしれない。

94年の夏に、私は子どもの雑誌の仕事で「サバイバル・キャンプ」を企画したことがある。丹沢の水無川の河原に小学生十人ほどを集めて電気・ガス、水道のない生活を体験させ、星を見ながら野宿してもらった。その模様をリポートし、掲載するというものだった。テントをはって、トイレを作り、火を起こしてごはんを炊く。子どもたちは最初とまどっていたが、非日常の不便さをみんなで力を合わせて楽しめるようになった。

玄倉川のキャンプ水難事故があった99年の8月、同じ水無川で今度は大学生とキャンプをしていた。ところが河原は集中豪雨で水かさを増してきた。夜9時を回った頃、私は身の危険を感じた。「すぐに逃げよう」とみんなに声をかけ、大事なものだけ持って、テントを後にした。すぐ上にある山小屋に避難させてもらい、一夜を過ごした。避難する時、水はすでに膝に達し、足を運ぶのがやっと。水の音がいつまでも耳に残った。翌日、家に帰ったら、玄倉川の中州でキャンプをしている人たちが、救助を待ちながら、流されてしまったことを知り、ぞっとした。

便利な生活が当たり前になっている今日、自然の偉大さに日頃から接し、その不自由さと恐さを体験しておくことって大事かもしれない。例の舞鶴の水没する観光バスの屋根で37人全員が助かった奇跡も、サバイバル術をもった人たちが協力しあって成し遂げた快挙だと思う。自然の一部でしかない人間は、知恵を結集して助け合って非常事態に臨むしかない。

（いしわたり・あき／企画・編集スタジオ「秋工房」代表、かながわNPO活動研究会「あむ」主宰）

私の好きな言葉

一見れい子

《ジャスト・フロートイング》

今夏のアメリカ・キャンプで、私たちは、川下りに挑んだ。

「挑んだ」と書いた直後でなんだが、朝出かける時点では、半ば川遊びの延長と言った軽い気持ちだった。このプログラムは、元々予定にはなく、地元スタッフの提案で、急遽加わった飛び入りメニュー。(もつとも、(蓋を開けてビックリ!)はこのキャンプの伝統のようだが)川下りについて、ひととおり話は聞いたものの、はっきりイメージがつかめないまま、とにかく彼女らの「ジャスト・フロートイング(ただ浮かんでるだけ)、おもしろいよ」の言葉に引かれてGOサイン。

午前中、トウイスブの町のファーマーズ・マーケットに寄った頃は、太陽がジリジリ照りつけて焼けるように暑かったのに、お昼前から段々曇ってきた。太陽が顔を隠すと、当地は一気に気温が

下がる。涼しくなって、長袖でも羽織りたい気分のところ、スタート地点に到着し、水着に着替える羽目に。持参したライフ・ジャケットを身につけ、小さい子どもから大人まで、タイヤ・チューブを一つずつ手に、川沿いの茂みを下りると、そう、そこにあるのは、ただ川、川、川。係員とか、貸しボート屋さんとか、日本ではウンザリすることの多い「ひとけ人気」のようなものが全くなくて、ただ、目の前を静かに川が流れている。後は、自分で川の中央まで歩いて行って、タイヤが流されないよう両手で押えながら、お尻をチューブの真ん中に挟んで、両手で舵をとりながら、下流まで気ままなフロートイングをお楽しみあれ、という訳。

地元スタッフによれば、川は浅いところでは、川底の石がお尻に当たって痛いくらいだから心配ないが、ただし、両岸は私有地なので、途中でギブ・アップして岸には上がるのはダメ。「エッ!?」浅いと言っても、流れは速く、川底は石がゴツゴツ、慣れない私たちには、ただ立っているだけでも大変だ。それに、カナダとの国境に近いこの渓谷の町では、真夏でも水は冷たく、その中で、四、五十分も乗り続けるなんてできるだろうか。川はゴールまでこのまま穏やかでいてくれるだろうか。

内心の不安をよそに、子どもたちは一人ずつチューブに乗って、川に浮かんで流れていく。最後に出発した私は、先をいく子どもたちの無事を神にも祈る気持ち。こうなっては、大人も子どももない。一人一人が流れを信頼し、自分の足で立ち、自分の手で舵をとるしかないのだ。必死でタイヤにしがみつく私の姿がおかしかったのだろう。振り向くと、五二才になる、キッチンの太陽ことスパーリンが「レイコ、リラックス! ジャスト・フロートイング!」と言って笑った。

スズメの学校から、メダカの学校へ

スズメの学校の先生は ムチをふりふり タイパツパ

(トスズメの学校)

学校には言いたいことがたくさんある。私は東京の国立市という、石原都知事に「グロテスク・異常」と形容された、子どもの自主性を重んじる教育をめざした街で小学校時代を過ごした。小学校低学年の頃は、登校すると他の子と一緒に校長先生によじ登る(?)のを毎朝楽しみにしていたのを覚えている。

親の都合で地方に引越し、中学で絶対的権力として君臨する教師、一つでも学年が違えば敬語を使い、こちらから挨拶しなくてはならぬ先輩の存在等々で力関係を叩き込まれた。とりわけ高校時代に、成績上位者が進学する県立の二つの有名校の生徒のみ、喫茶店とボーリング場の出入りが自由で、他の高校生は補導の対象とされていたことでは、世の中に理不尽な選別・差別があることを口惜しく思い知らされた。私はもちろん、「他の高校生」のひとりだったのだ。

学校の標語などに、「自主的に学ぶ」だの「自分で考える子ども」だが、そこには、先生の管理下でその許容範囲の下でという条件が実はついている。これを逸脱したとたん、生徒はグロテスクで異常な存在にされる。

教育も民営化の方向である。生徒を集め儲かる学校にするには、エリートを育成するのがよろしい。そして、勉強のできない生徒には、「個より公」の道徳教育を徹底する。めまいを起こしそうな状況だけど、希望はあると思いたい。いつも思うが、人間は、個々の興味・関心が実に多様で、社会を作る上でホントに都合がいい。得手不得手があるからこそ助け合える。社会をひとつの塊として上から眺め、支配したい手合いからすれば、個々人がその多様性を発揮し幸福を追求したいなら、税金をちゃんと払って、福祉に頼らず、リスクは自己責任の覚悟でやれというところだろう。とんでもない！ひとりひとりの人生はたった一回だ。だれもが安心して幸福を追求できる社会が欲しい。そして、そんな社会の実現には、教育の果たしていく役割がとても大きいと感じる。

だれが生徒か先生か（トメダカノ学校）

教育という言葉の定義は、多くの人にとってパウロ・フレイレの言うところの「銀行型教育」すなわち生徒の頭に新たな知識を記憶・蓄積させるもの、であろう。その頭の中のデータを適切な時に取り出して披露したり、いくつかの要素を重ね合わせて分析したりできるのが、有能な人とされる。私もずっとそう思い込んできたし、残念ながら、それが一般的なイメージであろう。だから、リベラルな考えの人々の中に教育は有害無益だという人さえいる。そこには批判的なものの方や、改革のエネルギーが感じられないからだ。

何かを学ぶとは、実は自分の足もとが崩されることだと私は思う。自分の持つ常識などは、同質の人間の存在しか考慮に入れない、極めて狭い世界でしか通用しない。全く別の視点でものを考えることは、自分の築き上げてきた論理の根幹が、実は世界の中で力を有する、ごく一部の者たちにとつて都合の良いものに過ぎないと知ることでもある。ベル・フックスが繰り返して注意を促しているように、現世界の価値観を定めているのは「白人至上主義的で、資本主義的な家父長制」を土台にした社会でもっとも利益を得る者たちだ。そして、他の者たちもその価値観を内面化して、自らを劣った存在とみなしてしまいがちとなる。何かを学ぶとは、自分がこれまで正し

いと思つて構築してきた理論の基となる既成の価値観を、自分の依つて立つ土台を、自ら崩すこと。それは、あなたが世界の中で力を有する一握りの者たちの側に居るのでなければ、恐れることは何もない。むしろそこから、さらにひとまわりもふたまわりも大きな世界が現出するのだから、ワクワクするし、本当に面白い。自由とはそういうこと、学ぶとはそういうことだろうと思つている。

フレイレやフックスに大いに勇気づけられながら、私もオルタナティブな学びの場である英会話教室「環境とフェミニズムの英会話寺子屋」を、細々と提供しているのであるが、英語を使うこと自体の権力志向に気づく（＝足もとが揺らぐ）ことも、参加者に求めている。言葉を発するときの、自身の主体と、その立場を問わずして安直な常識に逃げ込むことは、学びからはほど遠い。ちまたで流行りの「英会話」なるものの、中身が無いばかりか権力志向に絡めとられる弊害の大きさにあらがう、濁流のなかの木の葉のような取り組みではあるけれど、九三年に発足した寺子屋の歩みに関わることで、自らの主体性をとらえ返す契機とした人たちが、けっこういることに励まされている。

知的な好奇心をかき立てられることは、人間の大きな喜びのひとつと思う。それぞれの思考にしっかりとハマ

った枠が外されて、その外に踏み出すためには「自由への恐怖」を克服する必要があるが、共にチャレンジする仲間がいれば心強い。

寺子屋のポリシーは唱歌の「メダカの学校」である。「だーれが生徒か先生か」、誰もが先生になりうるし、また生徒になりうると考えている。老いも若きも、それぞれの人生経験から、お互いに多くを学びうるのだ。フアシリテーターは、その学びを尊重・奨励し、発見を共に喜ぶ存在である。常識のタガを外してみてもという提案も行う。

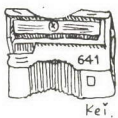
例えばある日の寺子屋で、ドラッグは犯罪だという常識が示されると、その常識にチャレンジが始まる。日本社会は酒というドラッグに寛容だが、北米は酔っぱらいを嫌うし飲酒運転などは、日本でマリファナ所持に向けてられるような社会悪扱い。逆にマリファナは犯罪だけど、多くの人が手を染めるので日本の飲酒運転くらいの犯罪イメージだ。社会によって同じ行為が違った見られ方をすることを確認し、常識を疑ってみることで、社会は私たちが作っている(だから変えられる)ことを思い出す。また例えば、*The early bird catches the worm.* (早起き鳥は虫を得る＝早起きは三文の徳)という諺があるが、じゃあ、早起き虫は早く起きたために鳥に食べられちゃうなら、寝坊がいいとも言えるのでは? などと視点を

変えることで物事が逆転する様を楽しみ、立場が違えばものの見方や価値観が変わることを、おもしろがり共有する時間を持っている。

「スズメの学校」型教育、序列社会の上昇志向教育では、世界は悪くなるいっぽうだと思う。ダイナミックに社会を変える可能性を伴いうるのは、「メダカの学校」型の、互いの関係性から学ぶ教育。教師が、学ぶ主体として生徒の前に自らの学ぶ姿勢を示すような教育だ。教師が一番柔軟に学ぼうとする生徒なのであり、そのことを喜んでいて、学ぶことが人生の主要な取り組みと直結しているべきだ。社会をより良くしていくことと、学びが直接コミットしていきべきなのだ。

人は、人生の手応えを感じつつ生涯学び続ける存在である。学びが終わって人生が始まるのではない。社会が理想の形になることを待っていてはいけない。自分の求める社会を作り出す活動の中に、おおいなる人生の喜びと、学びと、生き甲斐がある。

(いしはら・みきこ)「環境とフェミニズムの英会話寺子屋」主宰



突然ですが、
編集長たより……………稲邑 恭子

※

「ジェンダーフリー」その後

十一月号で上野千鶴子さんのインタビューを終えて、「ジェンダーフリーがダメなら男女平等でいきましよう」というのは私も思っていたことなのでスッキリしたものの、それで積み残してしまいう問題がいくつあることに気づいた。

一つ目は、「男女平等」だと男女の性別二元論に引き戻される感じが否めない(トランスジェンダーの人はどこにいけばいい?)ので、せっかく出てきた性の多様性のイメージを、では「ジェンダーフリー」以外のどういう言葉で表現するか。

二つ目は、学校現場は男女同一カリキュラムの実現で、「建前としては」男女平等とされているので、「男女平等」では変革のイメージの象徴として

のインパクトが弱いこと。小誌(二〇〇〇年十一月号)で村松泰子さんをインタビューした時に、文部省は「男女平等教育はいままでずっとやってきた」(その場合の男女平等教育とは「男女の特性は違う」が前提の男女特性教育であった)が、新たに「ジェンダーに縛られない教育」の必要性が出てきたので、その視点をはっきり打ち出すために「ジェンダーフリーな教育」という言葉が使われはじめた、というスタンスだと聞いたことを思い出した(ああ、ややこしい。でも少なくとも男女特性教育がダメだと言っているのだ)。

三つ目はジェンダーフリー・パッシングで実害を一番こうむっているのは性教育なので、そこをどう巻き返していくか。これもまた象徴闘争にならないような戦略が必要だと思われるので、近いうちに特集を組みたいと思う。

十一月号は注文がたくさん来たのでうれしかったのだけど、「ジェンダーフリー」に取り憑かれたようであたま

も神経もへろへろになった。そんな中で気づいたこと。

欧米では「ジェンダーバイアスから自由になる」ために、地道に数値を挙げて差別の実態を明らかにし、男女平等の環境をつくるためのしかけやしくみを具体的につくっていった。日本の場合、そうした具体的な方策をとるかわりに、人々の意識を「啓蒙」で変えようとした。そこにそもそも問題があったのではないかと。

いずれにしろ、保守派のパッシングによって意図的に議論が捻じ曲げられ、本来問題にすべき「性差別があるかないか」ではなく、「性差があるかないか」にずらされてしまった。これを元のスタートラインに引き戻す必要があるだろう。次号以降の課題とした。

「ジェンダーフリー」に関する山口智美さんの論考の続編は、十一月号を読んで寄せられたほかの意見・感想とともに次号に掲載予定。

編・集・後・記

●玄田有史さんの「ちゃんといいかげんに生きる」というのを聞いて、「いかげん」な私は今度からただの「いかげん」でなく「ちゃん」とをつけてやるぞと思った。その後の質疑応答の中で「ウィーク・タイズ(弱いながら)」というのが出てきた。いつも会っている人は自分と同じような情報しか持っていないが、たまにしか会わないような知り合いは未知の情報や考え方を持っているので突破口になるという話。転職に成功する人はウィーク・タイズの間関係を持つ傾向があるという。私はもしかして「ウィーク・タイズ」の安全ネットを増やすためにWeを出し続けてきたのかも知れない、とふと思った。

Weの編集と校正は私と中村さんの二人でやっているのだけど、今回は私がギブアップしたので河村さんや大沼さんが校正をしてくれ、おまけに冠野文さんが強力な助っ人としてヘルプしてくれました。フェミックスは一応会社なのですが、「雑居福祉村」に似ているといえは似ている。(稲邑)

●「どこが雑居福祉村？」と聞いたら、いろんな人がいれば補い合えるし誰かがダウンしてもなんとかなるからと言うんだけど、やっぱりなんか意味が違ふような……。けど、今回の特集の組合せもWeらしいというか？(何本か並行して進めていた企画が二転三転して)出来上がってみれば、一人ではなくゆるやかにつながりつつ元気になる生き方を見つけようという共通のメッセージがあると思うのですが、いかがでしょう。最初に玄田さんと二神さんの話を聞いた時は、なんで男はこんなにやさげなく、なんでこんなに甘やかされるんや〜!?という違和感が……。確かに、世間の「甘えてんじゃないよ!」というのと、ニートの原因を個人(自己責任)に解消せずに社会的問題として捉えようという二極の間で、お二人は意図的に後者に立っているのだろうと思つたものの、この違和感をどう表せばいいのか消化不良状態に……。だってシングルマザーの就業支援は「とにかく働く」と実にシンプル。できない理由や不安を言うより、やりたいこと探しや資格をとることより、何でもいいのか

ら働けば、できること・できないことも見えてくると。その意味で、二神さんの言う「一番嫌でないことから」に落とし込むのは分かりやすい。新川さんのカインドリボンもこじれた人間関係をときほぐすのはややこしいけど、一点だけ「子どもの利益は何?」と考えればシンプルになるというあたり納得。「ウタ・ハタ」だって、処分をちらつかせてのココロの強制はいかんだろ!と、シンプルにゆるやかに共闘できるといいのに。

特集記事をまとめた後、対人関係が苦手な若者の就業支援を地域で進めるNPO法人育て上げネットの工藤啓さん(27歳)に話を聞いた。大事な人は多様な人がゆるやかなつながりをもっていることだと。仕事を始めた若者の変化は?と聞くと、①人生に希望が持てる②父親との関係が変わる(会話が生まれる)③仕事の探し方が変わる(ハローワークや求人広告でなく商店街の張り紙等)。すごい成果と思ひ、重ねてその希望とは?と聞くと、明らかに自分と同類と思われる若者がアルバイトを始めることが希望なのだ。面接

がダメだから一緒に付いて行き一週間
タダで使って下さいというところから
始めて、農業やビルの清掃、窓ふきな
ど、話さなくていい体力勝負の仕事、
成果が見えやすい仕事(目の前のこと
をやっていたら後ろが終わっている)
がいいと。ありがとうと感謝され、慣
れれば自信がつく。そうやって少しず
つ社会参加して(社会性の穴を埋めて)
いくのだと。就業支援というのはプロ
グラムや政策を言うのではなく、対面
での、一人一人の生き様を通して伝え
るものなのだ、ようやく納得。(中村)

●『We』の読者で元毎日新聞の記者
重川治樹さんが、先日フェミックスに
来られて、「最近どう?」と言ったので、
「今月も何とか給料が出せたね、という
感じでやってます」と言ったら、「どう
せ、ここでは、完全なシングルは約一
名で、後は稼ぎのいい男に寄生してら
んでしょ。その程度のフェミニストな
んだから」と言われてしまった。別に
へこみはしなかったけど、その後、別
正のために「ニート」の記事を読んで、
そうか、私はさしずめ「パラサイトフ
ェミニスト」だなど、でも、それもい

いんじゃないかと。中村さんが「ロン
ダリングしてあげてるんだよね」とフ
ォロしてくれた。夫はマフィアでは
ないけど。そうそう、私が息子になっ
て欲しくない職業は、ヤクザと右翼
(職業か?)と自衛官です。(河村)

●ニートも引きこもりも親の資源が枯
渴したらたちまち路頭に迷うのだとし
たら、現実的に生き延びる手立てを考
えなくてはねと、特集記事を読んで他
人事ではないよなと思った。今の若者
だけでなく、私だって「自立」しなけ
ればというプレッシャーはかなり重か
ったが、若者達が求めているものが
「お金」ではなく「働くことの意味」な
どという高尚なことからしからよけい
やつかい。親の財産を若干あてにしな
がらほどほど稼いで、自分のペースで
好きなことをやる働き方というのを二
神さんが言っているが、これができる
のだからかなり特権的かも、とは言っ
ても、頼る資源が親だけというものもき
ついかから、助け合える人間関係(パラ
サイト・ネットワーク?)を少しずつ
作って広げていけばいいのかも。私に
は親はいないが、親の遺してくれたお

くらしと教育をつなぐWe

2004年12月号(128号/vol.13 No.8)

2004年12月1日発行

定価……680円(本体価格648円+税)
(年間購読料7500円/送料共)
発行……femix・フェミックス
〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703
tel & fax 03-3424-3603
E-mail: info@femix.co.jp
http://www.femix.co.jp
みずほ銀行 池尻大橋出張所(普) 1501277
郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス
編集……稲邑恭子・中村泰子
装幀……川口民子 イラスト……中村 桂
印刷……(有)イー・エム・ビー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

金を少しづつ取り崩しながらほどほど
の働き方をして(フェミックスの給料
じゃ自立は無理だし)、適度な遊びを入
れて(遊び過ぎとの声も聞こえるが)
「ちゃんとい加減に生きていく」のだ
から、半人前でも何かできるといっ
本にはなれそうなきがした。(大沼)

●前号25頁上段17行目西川恭子議員とあ
るのは誤りで、正しくは西川京子議員
です。お詫びして訂正します。(編集部)

『議会からジェンダーフリー』木村民子著

「男女共同参画」の基本的情報はこれでバッチリ、闘い方のノウハウも自ずと沸いてくる一冊。
A5判並製 80頁・フェミックス刊 500円(税込)

『やさしい英語でフェミニズム』

～英語で女性問題を語るためのワンポイント・レッスン～

女性問題を語るときによく使われる語彙や表現を、わかりやすくまとめた本。

Colors of English編 吉原令子監修

A5判並製 128頁・フェミックス刊 1,260円(本体1,200円+税)

『居場所考—家族のゆくえ』水田宗子著

映画や小説を題材に、女性の、そして男性のさまざまな居場所を探る、
フェミニズム批評の第一人者による珠玉のエッセイ集。

【目次より】 郷愁としての家族／近代文学における家族の不在／子供の風景／シルヴィア・プラスのこと
など／〈家霊〉の女と〈放浪〉する女／〈他者〉とどう関わるのか／物語の消滅／明るい地下室／
老人の居場所／老人の欲望／記憶のない街、物語のない街／他者という〈厄病神〉／ダイアナさんとオ
リエンタリズム／瘦せカルチャーのことなど／家族劇の終焉とフェミニズム 他

A5判並製 256頁・フェミックス刊 定価1800円(本体1715円+税)

『Working With Women～性暴力被害者支援のためのガイドブック～』

アメリカ ミネソタ州マンケイトの性暴力被害者支援センターでおこなわれている、「性暴力被害者支援ボ
ランティア養成プログラム」の全10回のコースを元に構成したガイドブックです。「自己決定をサポート
する」ための具体的な方法が示されています。性暴力の被害に遭った女性を支援するための手引書と
して、現在援助に関わっておられる方はもちろん、これから援助職やボランティアを目指す方にも、是
非読んでいただきたい内容です。

フェミニストセラピー研究会編

A5判並製 176頁・フェミックス刊 1,260円(本体1,200円+税)

『セックスするなら眠りたい』ピッピークラブ編

20～30代の子育て中の女性たちが、性について本音で語り合った回覧ノート。

真剣だが、明るくさわやかな女性たちの「本音集」。

四六判並製 160頁・フェミックス刊 定価950円(本体905円+税)

『わがままな女は幸せになれる』河村ふみ著

～Let's 自己表現・自己主張トレーニング～

言いたいことをさわやかに表現し、人と気持のよい関係を築くためのコツやスキルが楽しく学べる本。

【目次より】 自己表現トレーニングってなあに?／肯定的な気持ちを伝える／わがままのススメ／自分を
はげます／自己表現のコツ／守りより攻め／天使は怒らない?／怒りは正当防衛。「攻撃」は「自己主
張」へのステップ／批判されてもめげないで／批判されても生きられる／雨降って地固まる／甘え上手
になろう／あきらめない／究極のATをめざして

四六判並製 176頁・フェミックス刊 1,050円(本体1,000円+税)

Femix・フェミックス

TEL/FAX 03-3424-3603

E-mail : info@femix.co.jp URL : http://www.femix.co.jp

フェミックス推奨洗剤 イオン・パウダーソーダ

—重曹の衣類洗濯剤—

独自製法の重曹と、油汚れに強い純せっけんを10%配合
高い洗浄力&柔らかな仕上がりに

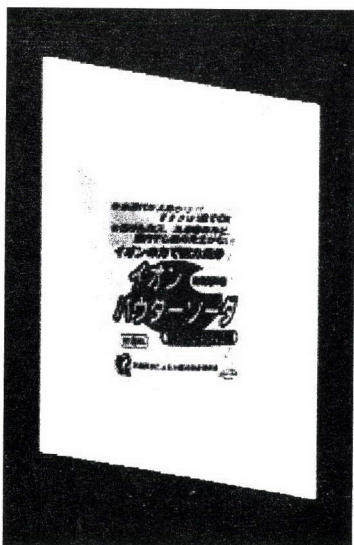
- 有機物が一般的な洗濯洗剤の10分～15分の1のため、すすぎが1回で済みます。
- 肌の弱い方にも安心です。(合成成分無添加)
- 室内干しをしても嫌な臭いがしません。
- 洗濯物の黄ばみを抑制します。
- 洗濯槽にカビがつかず、洗濯槽もきれいになっていきます。

成分 重曹+純石鹼 10% 1kg 1050円(税込み)

使用量 水1Lに1g(30Lの水で洗濯をした場合約33回分)

ご注文は、フェミックスまで

TEL/FAX03-3424-3603 Email info@femix.co.jp

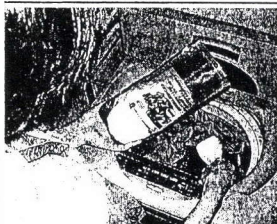


<使った人の感想>

●ジーンズをはいたとき、一番その気持ちよさが実感できました。(加藤 昭仁 家庭科教員 『We』連載者) ●とにかくシートが全然違う。ゴワゴワ感、洗剤臭がしないので、寝るとき気持ちがいい。変な臭いが

しないので、雨の日でも洗濯が楽しみ。(大沼もと子 フェミックススタッフ) ●今までは3回すすぎでした。1回のすすぎで3回のすすぎよりすすきりするなんて、今までは何だったのという感じです。(桜井映子 読者 エステサロン モエ)

日 本 経 済 新 報 月 刊 (夕刊) 2004年(平成16年)5月15日(土曜日)



すすぎは一回で済む

衣類の洗濯が毎日の日課となつていて家庭には多いはず。ただ、すすぎ洗いで繊維にダメージを与え、ナトリウムなどの洗剤を落とすため、洗濯の度に目印前後の水道水を使うことになる。しかも排水には洗剤成分の油分が多く含まれ、環境への負荷も大きい。

洗浄力を落とさずに排水の汚れを軽減し、しかも節水につながる洗剤「イオン・パウダーソーダ」を開発・販売しているのが家庭用品メーカーのフリーマ(福岡県大川市)。同社では重曹の

グリーン通信

節水効果ある重曹洗剤

マイナスイオンが汚れ物質であるプラスチックを溶かす。その反発作用で汚れを除去するメカニズムに注目。製造工程の温度設定を上げることで高機種の重曹をつくりだし、繊維の奥まで行き渡るように油分の粉せっけんを10%配合するのを加える。

油分が一般的な洗濯洗剤の1分の1のため、すすぎが一回で済むほか、排水の汚れも少ない。パクリアの酵素となる機敏成分が衣類に付着しないのでお手軽にしても洗濯臭が落ちず、洗濯槽の奥に発生する菌の心配もない。水と酢を混ぜ合わせてクリーム状にすれば台所などの頑固な汚れ落としにも応用できそう。価格は1kg入りで五十円。

同社長の青松瑛子さんは元専業主婦。子どもの肌にも環境にもよい洗剤を探し求めてきたものの不満を感じてきたという。四人の子どもたちが集まったのを機に「自分が納得のいくものを実験を重ね、重曹と粉せっけんだけの洗剤を生み出した。主調の塩酸でつくられたエコ洗剤で環境をきれいに洗い上げていきたいものだ。」(グリーンカルネイバー代表 後藤 浩成)

●使い始めたら、ないと思っていた洗濯槽のカビが出てきてびっくり。カビがつかないというのは本当なんだと実感。洗濯時間も短縮できてうれしい。(河村ふみ フェミックススタッフ)

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で○号から購読希望と明記して年間購読料7500円をお振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、女と男が対等に生きることができるとともに社会の実現のために必要な、さまざまなテーマを取り上げ、特に教育現場において性教育やいじめ防止教育なども包括した「男女平等教育」の実現と、「男女共同参画社会」実現のための具体的なノウハウを追求します。

■2004年度特集

4月号 (121号) 地域で取り組む男女共同参画/5月号 (122号) 女と農とジェンダー/6月号 (123号) 多様性を尊重する性教育/7月号 (124号) 働くことの「現実」と「希望」/8/9月号 (125号) 「支配のテクニク」を突き崩せ!/10月号 (126号) 緩やかにつながりあってエンパワメント/11月号 (127号) バックラッシュを打ち負かせ!

■連載

女が歳をとるといふこと 木村栄◇わがまま映評 満田康子◇乱読大魔王日記 冠野文◇過去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇Gender Free Breeze 三浦純子◇みんなで楽しく政治をしよう! 鈴木めぐみ◇仕事場の周辺から 石渡 秋◇私の好きな言葉 二見れい子◇リレーエッセイ〜ベル・フックスと『関係性の教育学』

■女と男の家庭科新時代

授業実践/風がかわる匂いがかわる◇新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎◇曲がり角の家庭科 梶原公子◇「ひまわり」の日々 入江一恵◇“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」沼崎一郎

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■2003年度特集

4月号 (111号) ジェンダーフリーを阻む男の病/5月号 (112号) みんなのフェミニズム/6月号 (113号) スキルズ・フォア・ライフー生きる力/7月号 (114号) 元気になる性教育 /8/9月号 (115号) 《公平》な制度を考える一年金・DV/10月号 (116号) 子どもが元気になる場所/11月号 (117号) 暴力を終わらせるために/12月号 (118号) DV被害者支援と当事者のエンパワメント/2004年1月号 (119号) 働く場をつくる/2004年2/3月号 (120号) 若者の体験空間をひろげる

■Weの置いてある書店■

東京 ●東京ウィメンズプラザ内一パッチワーク
●新宿2丁目一模索舎
●西荻窪一ナワ・プラサード

大阪 ●ウィメンズブックストアゆう

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」としてお申し込み下さい。)

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイランドハイツ703

<http://www.femix.co.jp>

E-mail info@femix.co.jp